

恵泉女学園大学 人間社会学部

国際シンポジウム

「海外体験学習における受入側のインパクト」

報告書

2008年2月

恵泉女学園大学 人間社会学部

文部科学省 特色ある大学教育支援プログラム（特色GP）

「専門性を持った教養教育としての体験学習」

「海外体験学習における受入側のインパクト」当日プログラム

時間	内容	担当者
13:00～13:05	学長あいさつ	木村利人
13:05～13:20	基調報告	大橋正明
13:20～13:30	長期FS(タイ)の概略	上村英明
13:30～14:00	恵泉長期FSプログラムにおける受け入れ先及び受入機関におけるさまざまな影響	ドゥシット・ドゥアンサー
14:00～14:30	恵泉長期FS学生によってもたらされたパンラオ村と村人に対する影響	スマリー・ワナラット
14:30～14:40	休憩	
14:40～14:45	短期プログラム(バングラデシュ)について	大橋正明
14:45～15:15	恵泉FS学生を受け入れることに対するPAPRIと周辺住民の影響	アブー・パセッド
15:15～15:20	短期プログラム(ドイツ)について	川戸れい子
15:20～15:45	ドイツ・ルール工業地帯でのフィールドスタディ	白石文子
15:45～15:55	休憩	
	モデレーター	上村英明
15:55～16:25	コメントおよびその応答	和栗百恵
16:25～16:55	質疑応答	
16:55～17:00	まとめ	上村英明
17:00～17:05	閉会の辞	大橋正明
	総司会	斉藤百合子

日時 2007年11月11日

13:00～17:00

場所 恵泉女学園大学 J棟 202教室



当日のシンポジウムの様子(2007年11月11日)

特色GP「専門性をもった教養教育としての体験学習」取組担当者
恵泉女学園大学人間社会学部長

大橋 正明

OHASHI Masaaki

昨今、海外で体験学習を行っている大学は少なくありません。この海外での体験学習は、海外フィールドトリップ、スタディアブロード、海外ボランティアなどと呼ばれています。本学は、この取り組みをフィールドスタディと呼び、1999年から実施してきました。

多くの大学では、「好き者、変わり者の教員が学生を海外、特に貧しい国に連れて行く」ことがきっかけで始まった海外体験学習ですが、その数が増えるに連れ、大学として制度化する段階に至っています。具体的により検討を重ねる必要がある点としては、カリキュラム上での位置づけ、実施のための予算化や組織化、そしてリスク管理などが挙げられます。ここで見落とされがちなのは、海外での体験学習を受け入れる相手側に私たちが与えているインパクトです。

日本の学生たちを受け入れてくれるのは、多くの場合、現地の住民やNGOなどです。彼らは、日常的には自分たちの生活や活動をしています。つまり教育関係者や教育機関ではないのに、多くの場合は親切心から私たちが快く受け入れてくれているのです。しかしその受け入れに伴って生じるインパクトについて、私たちはどれだけ注意を払ってきたでしょうか? 良いインパクトだけを生み出しているなら良いのですが、経済的、社会的、文化的に、相手やその周囲、例えば女性や弱者などに好ましくないインパクトを与えていないでしょうか?

海外に送り出す側と受け入れる側の間には、二つの非対称性があると感じています。一つは、大学が学費を受け取って行っている学生教育が、しばしば無償あるいは廉価で受け入れ側によって担われている点です。私たちは、多くの場合受け入れに伴う費用を何らかの形で支払っています。しかしそのお金が、負担や負のインパクトを負った人たちに適正に分配されているか否か、私たちは十分な注意を払っていません。ホテルや旅行者には請求された料金を払うのに、NGOや村人の好意にしばしば甘えていないでしょうか?

もう一つの非対称性は、送り出し側と受け入れ側間の機会の差です。私たちから一方的に私たちの学生の教育や交流、あるいはボランティアを旗印に現地に押しかけるだけで、同様な機会を相手に保障していません。こちら側だけが学んだり、善意を発露できればよいのでしょうか? この非対称性は、特に経済的に貧しい国や地域で大きくなります。こうした点を適正に考慮せずに、海外体験学習を継続することは、傲慢にもなりかねません。受け入れ側の組織や村の人々に対して、海外に学生を送り出す私たちの側が、もっと配慮して受け入れに応える必要があるのではないのでしょうか。

少なくとも私たちは、これらの点をもっと認識し、受け入れ側の負のインパクトを少なくするような工夫をして体験学習を継続していく、さらには構造的な非対称性を少しでも和らげるために、受け入れ側に一層裨益することを行う必要もあるのではないかと考えます。

今回私たちが実施したこの国際シンポジウム「海外体験学習における受入側のインパクト」は、これまで照射される機会が少なかった受け入れ側に生じているインパクトや影響について、直接何う大変良い機会になりました。海外で本学の体験学習プログラムを受け入れてくださっている皆様、このシンポジウムで率直に指摘してくださった受け入れ側のインパクトは、私たちの想像を超えたものがあること、考慮すべき点が少なくないことが分かりました。

このシンポジウムが実現した背景には、本学を含めた数大学が続けてきた「大学教育における海外体験学習研究会」で蓄積された経験交流と問題探求があったこと、そして文部科学省の特色GPとして本学の体験学習が選択され支援を受けたことがあります。

このシンポジウム報告書が、多くの大学関係者の目に触れ、受け入れ側のインパクトにより一層配慮し、継続的に質の高い海外体験学習プログラムを創り出す参考になれば幸いです。

はじめに	1
シンポジストとコメンテーターのプロフィール	4
国際シンポジウム「海外体験学習における受入側のインパクト」	
学長あいさつ	
木村利人 恵泉女学園大学学長	6
基調報告「なぜこのシンポジウムを開催するのか」	
大橋正明 恵泉女学園大学人間社会学部長	
特色 GP「専門性をもった教養教育としての体験学習」取組担当者 (要旨英訳 English summary)	8
第1部 長期フィールドスタディ	
「長期フィールドスタディの概略」	
上村英明 恵泉女学園大学人間社会学部国際社会学科教授、体験学習 CSL・FS 委員長	17
「恵泉長期 FS プログラムにおける受け入れ先および受入機関におけるさまざまな影響」	
ドゥシット・ドゥアンサー チェンマイ大学教育学部教授、恵泉女学園大学大学院兼任講師 (要旨英訳 English summary)	19
「恵泉長期 FS 学生によってもたらされたパンラオ村と村人に対する影響」	
スマリー・ワナラット メーカーオトム・エイズコーディネーションセンター代表、チェンライ県パンラオ村元小学校教員 (要旨英訳 English summary)	25
第2部 短期フィールドスタディ	
●バングラデシュプログラム	
「バングラデシュ短期 FS の概要」	
大橋正明 特色 GP「専門性をもった教養教育としての体験学習」取組担当者 バングラデシュ短期 FS 担当	33
「恵泉 FS 学生を受け入れることに対する PAPRI と周辺住民の影響」	
アブー・バセッド Poverty Alleviation through Participatory Rural Initiatives, Bangladesh 専務理事 (要旨英訳 English summary)	37
●ドイツプログラム	
「ドイツ短期 FS の概要」	
川戸れい子 恵泉女学園大学人間社会学部国際社会学科教授、ドイツ短期 FS 担当	43
「ドイツ・ルール工業地帯でのフィールドスタディ」	
白石文子 ボーフム・ルール大学外国語教育研究所日本語学科学科長代理、ドイツ短期 FS 受け入れ担当者 (要旨英訳 English summary)	46
第3部 コメント・議論・まとめ	
コメント・議論	
和栗百恵 早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンター (WAVOC) 客員講師	55
質疑応答	62
まとめ	
上村英明 恵泉女学園大学体験学習 CSL・FS 委員長 (要旨英訳 English summary)	67
シンポジウム参加者の感想	73
国際シンポジウム「海外体験学習における受入側のインパクト」の録画 DVD 鑑賞会の感想	75
編集後記	76

Preface	1
Profiles of lecturer and commentator	4
Keisen University International Symposium on Learning through Experience “Impact of Learning through Overseas Experience from the Hosts' Perspective”	
Opening remarks KIMURA Rihito, the president, Keisen University	6
Keynote speech “Why are we holding this Symposium?” OHASHI Masaaki, Keisen University (English summary)	8
Part 1 : Long-term Field Study	
“Aims of the Long-Term Field Study Programs” UEMURA Hideaki, Keisen University	17
“Various kinds of Impacts on the Hosts and Hosting Institutions of the Keisen University Field Study Program” Dusit Duangsa Dr., Chaingmai University (English summary)	19
“Impact on Panglao Village and Villagers of Field Study Visits by Keisen University Students” Sumalee Wanarat, Representative of Maekhaothom AIDS coordination center, Chaingrai, Thailand (English summary)	25
Part 2 : Short-term Field Study	
● Bangladesh FS	
“Aims of the Field Study Program” of Bangladesh OHASHI Masaaki, Keisen University	33
“Impacts on PAPRI and Residents of Hosting Keisen University Students for the Field Study Program” Abu Based, Poverty Alleviation through Participatory Rural Initiatives, Bangladesh (English summary)	37
● German FS	
“Aims of the Field Study Program of German” KAWADO Reiko, Keisen University	43
“Field Studies in the Ruhr Industrial Region of Germany” SHIRAIISHI Fumiko, Japanese Language Department, the Ruhr-Universitat Bochum, Institute of Incentive Language Training, Japonicum (English summary)	46
Part 3 : Comments and Discussions	
Comments & Discussions WAGURI Momoe, Waseda University	55
Question & answer session	62
Conclusion UEMURA Hideaki, Keisen University (English summary)	67
Impressions from audience	73
Impression from Ex long-term FS student	75
Editor's notes	76

シンポジストおよびコメンテータープロフィール

ドゥシット・ドゥアンサー

チェンマイ大学教育学部、同大学院ノンフォーマル教育研究科教授、恵泉女学園大学大学院兼任講師、恵泉女学園大学長期 FS プログラム現地受け入れ総責任者。

Dusit Duangsa,Dr.

Professor, Chiangmai University (CMU), Faculty of Education.

Professor, Chiangmai University Graduate School, Non-formal Study Course.

Part-time lecturer, Keisen University Graduate School.

He is the person in charge of the host side for Keisen University's long-term Field Study program in Thailand.



スマリー・ワナラット

タイ国チェンライ県パンラオ村元小学校教員。タイ北部チェンライ県のローカル NGO メーカオトム・エイズコーディネーションセンター代表。本学の長期 FS の農村フィールドトリッププログラムを第 1 期から 8 年間受け入れている。

Sumalee Wanarat

Former elementary school teacher in Panglao Village, Chiang Rai Prefecture, Thailand.

Representative of the local NGO, Maekhaothom AIDS Coordination Center.

She has been a host of field trips for Keisen University's long-term Field Study program in Thailand for over 8 years.



アブー・バセッド

バングラデシュ短期 FS プログラムの受け入れ機関で、農村開発を目指す現地 NGO, PAPRI (Poverty Alleviation through Participatory Rural Initiatives) 専務理事。

Abu Based

Executive Secretary, PAPRI (Poverty Alleviation through Participatory Rural Initiatives), a local NGO in Bangladesh.

It has been the host organization for Keisen University's short-term Field Study program in Bangladesh for 3-4 times including 2007.



白石 文子

ドイツ短期 FS 受け入れのルール大学外国語教育研究所日本語学科 (LSI: Landesspracheninstitut in der Ruhr-Universität Bochum - Japonicum) 学科長代理。

SHIRAIISHI Fumiko

Deputy Head, Japanese Language Department, the Ruhr-Universität Bochum, Institute of Intensive Language Training, Japonicum.

It is the host organization for Keisen University's short-term Field Study program in Germany.



和栗 百恵

早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンター (WAVOC) 客員講師。「大学教育における海外体験学習研究会」メンバー。

WAGURI Momoe

Program Director, WAVOC (The Hirayama Ikuo Volunteer Center, Waseda University).



シンポジストおよびコメンテータープロフィール

木村 利人

恵泉女学園大学学長

KIMURA Rihito

President, Keisen University.



大橋 正明

恵泉女学園大学人間社会学部長、国際社会学科教授。元フィールドスタディ委員長、バングラデシュ短期 FS を 1999 年から毎年実施している。特色 GP「専門性をもった教養教育としての体験学習」取組担当者。「大学教育における海外体験学習研究会」代表。

OHASHI Masaaki

Professor, Keisen University & Dean, Faculty of Human & Social Studies.

Former chairperson, Field Study Committee.

He has been managing the short-term Field Study program in Bangladesh every year since 1999.



上村 英明

恵泉女学園大学人間社会学部国際社会学科教授、平和文化研究所所長、体験学習 CSL・FS 委員長。

UEMURA Hideaki

Professor, Keisen University, Faculty of Human & Social Studies.

Director of Institute of Peace Culture Studies.

Chairperson, CSL(Community Service Learning)/FS(Field Study) Committee.



斉藤 百合子

恵泉女学園大学人間社会学部助教。体験学習 CSL・FS 主任。「大学教育における海外体験学習研究会」メンバー。

SAITO Yuriko

Lecturer, Keisen University, Faculty of Human & Social Studies.

Coordinator of the CSL/FS Committee.



学長あいさつ

恵泉女学園大学 学長 **木村 利人**
KIMURA Rihito



サワディ・クラブ。今、タイ語でこんにちは、と申しあげました。さて、本日の国際シンポジウム「海外体験学習における受入側のインパクト」は、今まで他学でも実施したことがない非常にユニークなテーマを扱ったシンポジウムです。本日は、ドウシットさん、スマリーさん、アプー・バセッドさん、白石さん、和栗さんと、海外体験学習に関して第一線で活躍していらっしゃるゲストをお迎えしています。ゲストの皆さまにいろいろな課題を率直に話していただいて意見を交換したいと思います。

さて、私はこれまでタイに5年、ベトナムに2年、スイスに3年、アメリカに22年住んで各地の大学で教えていました。その間、いろいろな国からいろいろな学生あるいはいろいろな方々を受け入れた経験があります。時に、急に連絡がきて、滞在して、そして帰ったとき何も言っていない方々もいました。そのときの訪問者の身勝手ともいえる態度にどう対応したよいかを考えたものでした。

恵泉女学園大学は、このところ非常に元気の良い女子大学ということで頻りにマスメディアに取り上げられております。先日も朝日新聞（2007年10月14日）に体験学習の記事が掲載されました。恵泉の中でも元気の良い人間社会学部のトップリーダーの1人である大橋先生が中心になって長年にわたって蓄積してきた海外体験学習プログラムを巡って、今回は受け入れ側の話をテーマに掲げました。本学の体験学習は、2006年度に文部科学省の「特色ある大学教育支援プログラム」（特色GP）に採択されました。2007年度は生活園芸の取組みが、2年連続で特色GPに採択されています。

元気の良い教職員と学生たちが一体となって作りあげてきた恵泉の精神、つまり「聖書を学び、国際を学び、園芸を学ぶ」という建学の理念の3本柱によって打ち立てられている本学のシンポジウムで有意義な時間を過ごし、率直な意見を交換していただきたいと思ふます。

どうもありがとうございました。

女子大・短大の役割

第3種郵便物認可

2007年10月14日付

朝日新聞

恵泉女学園大 海外で体験学習

1960年に女学校として始まった恵泉女学園(東京都摩絜市)は、基盤、聖書、国際、園



訪れたカレン族の村で体験作業を手伝う岩切香さん(右から2人目)と岩切さん提供

業の三つ柱のユニークな教育を進める。最近注目されているのが、体験学習の一環として海外を中心に実施している「フィールドスタディ」の取り組みだ。FISの取り組みは、旅行を兼ねた06年度に始まった。参加するのは主に人間社会学部の学生で、長期と短期の種類、同部の大橋正明学部長は「現場の面白さを伝える。自然と触れ合える。船旅の移動は難しいが、学生たちが変わった材料に変わらぬ」と語る。

現地に入り独自に研究

に滞在。現地の大学で2カ月わたってタイ語を学んだりNGOを見学したりする。その後自らテーマを決め、現場に入っていく「研究」だ。06、07年に参加した4年生の岩切香さん(21)は、稲作農業について学ぼうと稲作農業をしているカレン族の村に入った。最初は言葉も通じなかったが、1週間ほど住み、同じ物を食べ、子どもと一緒に魚を取りながら言葉を覚えた。そうして信頼関係を築き、色々な話を聞かせるようになった。当初は稲作に環境破壊をイメージしていた岩切さんだが、カレン族が森の旅(ナゴ)プログラムが再生にも配慮していることを学んだという。

8年生の鈴木かほりさん(20)も同時に参加。カレン族の稲作文化をテーマにし、森や川など自然の中にも稲作が宿っていることを考え方に触れた。「私たちが目指しているのは、カレン族はみんなが、カレン族はみんなが存続している。こうした長期研修には毎年10人前後が参加し、最後にレポートを提出する。短期研修は夏休みなどを活用し、期間は1、2週間ほど。教員の専門分野に従って、フィールドプログラムが設定されている。昨年度はハンガリーシユの「貧困と豊かさ」を開発したNGOに触れる旅(ナゴ)プログラムが用意された。毎年80〜90人が参加する。

大学院1年の末本菜さん(28)は大学2年の時にハンガリーシユに行き、ストーリーテリングの援助活動を見た。その経験が「人生のターニングポイントになった」と語り、再来年NGOの国際協力を機に仕事をしたいと語っている。

大学院1年の末本菜さん(28)は大学2年の時にハンガリーシユに行き、ストーリーテリングの援助活動を見た。その経験が「人生のターニングポイントになった」と語り、再来年NGOの国際協力を機に仕事をしたいと語っている。

基調報告： なぜこのシンポジウムを開催するのか

恵泉女学園大学人間社会学部長
特色 GP「専門性をもった教養教育としての体験学習」取組担当者

大橋 正明

OHASHI Masaaki



本日は、この「海外体験学習における受入側のインパクト」という少し変わったタイトルの国際シンポジウムにご参加くださり、大変ありがとうございます。特にタイ、ドイツ、バングラデシュからおいでいただいた4名のシンポジストの方々に、感謝を申し上げます。

シンポジウムを始める前に、どうしてこのようなシンポジウムを開催しようとしたのかを、企画責任者として簡単に説明させていただきます。

1. 恵泉女学園大学における海外体験学習

本学で組織的な海外での体験学習が始まったのは、1998年に新設された国際社会学科（当時は国際社会文化学科）の入学が2年生に進級した1999年のことです。この海外での体験学習は、フィールドスタディ、学内では短くFSと呼ばれています。

このフィールドスタディ（FS）には長期と短期の2種類があり、どちらも2年生以上が履修できます。人間社会学部の国際社会学科と人間環境学科の共通専門科目ですが、もう1つの学部である人文学部の学生も履修することができます。FSに参加する学生は、前の学期に週1回2単位の準備科目を、参加後の学期には2単位のフォローアップ科目を受講します。

この体験学習が目指すものは、簡単に言えば「百聞は一見に如かず」です。教室や教科書、映像やコンピューターなどを通じて知識として学んだことを現場で体験する。そうして学習の意味を理解することで、勉学への意欲が高まる、相手や対象への理解が深まる、さらに現場で得た感動や共感を通じて学生の人生に大きな影響を与えることが目的です。

例えばバングラデシュを訪問したある学生は、「事前準備授業で詳しく学んだけれども、実際に訪問するまではバングラデシュ全部が難民キャンプのような悲惨なところだと思っていた」と率直に語ってくれました。何人もの学生が、FSでの体験をきっかけとして卒業後の進路を定めました。

では短期FSと長期FSそれぞれについて、簡単に説明します。

短期FSは、教員が自分の研究対象としている地域を、10人前後の学生と一緒に10日間から2週間ほど訪問するものです。この際企画や手配、準備は、教員が学生と一緒に行うこ



インドネシア短期FS：コーヒー農園で収穫したコーヒー豆

とが原則で、旅行代理店に丸投げはしません。2007年度は7つのプログラムがあり、それぞれにテーマが設定されています。夏休みにはバングラデシュ、インドネシア、ドイツ・オランダ、アメリカで実施され、春休みにはフランスとタイと沖縄が実施されます。インドネシアのFSは「開発を現場で学ぶ」というテーマで、コーヒー農園を訪問したり、ホームステイをしました。「アメリカの『移民社会』と9.11以後の状況を考える」というアメリカのFSは、アジア系・ヒスパニック系・アラブ系の人々の居住区や、9.11事件のワールド・トレード・センター跡地を訪問しました。

一方2000年から実施している長期FSは、北部タイの中心都市チェンマイ市にある国立チェンマイ大学の協力を得て実施している半年間のプログラムで、毎年10から15名の学生が参加します。最初の約2ヶ月間はチェンマイ大学で、タイ語やタイ社会について学びます。また北部タイの農村や山岳民族の村などを訪れ、後半のフィールドでの体験学習に備えます。

その後の約3ヶ月間は教育、人権、少数民族、環境や自然資源、保健衛生・エイズ、女性や子どものエンパワーメントなどのテーマを各自が選択し、それらに取り組む現地のNGOや政府機関、農村などに毎日通い、あるいは住み込んで活動を行います。学生は実際の活動を担えるだけの語学力や実力はありませんが、出来る範囲のお手伝いをします。

この3ヶ月間は3期に分かれており、各期の「問題や組織を理解する」、「プロジェクトの目的と方法を説明する」などといった課題への答えを求めながら、体験を重ねていきます。そして各期が終了するごとに、チェンマイ大学に戻り、それぞれの体験や観察を発表し、互いに学びあい、教員から助言や注意を受けます。最終的に学生たちは、各自が定めたテーマに関して、少々分厚いレポートを仕上げます。

2. 「受入側のインパクト」について

この体験学習は、参加する学生には先に述べたようなさまざまな成果をもたらしています。また受け入れ先で日本の文化を紹介する、受け入れ先団体を紹介する日本語のパンプを作る、それを日本で紹介する、生産する物品を日本で販売する、卒業後そこにボランティアに出かける、といった相互交流や小さな「恩返し」も行われてきました。

また私たちが気づいていない、積極的な、素晴らしいインパクトが現地側にもっと生じているのかも知れません。それについては、今日ぜひシンポジストの方々から教えていただきたいと思います。

こうした肯定的なインパクトがある一方で、私は学生がNGOや農村を訪問したり滞在することが、受け入れ側や現地社会に大変な負担や犠牲を強いている、さらには好ましくないインパクトを生み出しているのではないかと、フィールドスタディを始めた時点から懸念していました。この点が気になったのは、私自身がNGOの一員としてバングラデシュの農村開発の活動に長年携り、こうした外部者の訪問を受け入れる側であったせいかもしれません。

さらに2006年夏バングラデシュで、ある痛ましい事故が起き、こうしたことを再度深刻に考える機会になりました。今日のシンポジストであるバセッドさんが代表を務めるバングラデシュの農村開発NGOであるPAPRIを日本のある大学の学生グループが訪問していた時、学生達の食事作り担当の現地スタッフ2名が、漏れていた燃料に引火した火事で火傷し、亡くなったのです。この機会にこのお2人のご冥福を、改めてお祈りします。

今回のシンポジウムは、私たち教育関係者がこうした負のインパクトが存在することに

気がつき、深く認識し、予防したり影響を軽減するための対応を行うきっかけになってほしいと願っています。

私自身は、以下に述べる二つの非対称性と、社会的・文化的影響から生じる受け入れ側へのネガティブなインパクトを気にしています。

(1) 有償と無償の非対称性

私たちの訪問が受け入れ側に負担を強いていることは、間違いない事実です。その負担のうち、金銭的に換算できるものに支払いをするのは当然ですが、客への好意として換算を拒むもの、そして金額には換算できないものが多々あります。一方送り出す側の私たちは、学生あるいはその親から授業料を受取っています。つまり私たちが行う有償の教育活動に、無償の協力いただいていることとなります。一回きりなら許されるのかもしれませんが、私たちのように科目として毎年繰り返す場合、何度も好意に甘えて良いのでしょうか？こうした負担に、私たちがもっと敏感になる必要があるように思います。

さらに旅行者やホテル、レストランなどの営利団体には対価を支払うのに、非営利の受け入れ団体や村人には無償や廉価で負担をしばしば引き受けていただいている、という非対称性も気になります。

私たち自身が外国からの学生グループの訪問受け入れに大変に苦勞する、本務や本業に影響が生じるという経験をしています。本来ならその地域の子どもの教育や住民の組織化、保健衛生、環境保全などのために費やすべき貴重な時間や人材、そして資金を、私たちの学生の教育のために振り向けているのは、それらの資源の提供者や受益者にとって納得できることなのでしょうか？さらにそうした負担を強いていることを、受け入れ側が率直に指摘できる関係や環境を、私たちは作り出しているのでしょうか？

(2) 体験機会の非対称性

もう一つ気になる非対称性は、特に経済的に貧しい国に私たちは押しかけるばかりになっていることです。現地でFSに参加している学生は多くのことを学んでいるほか、交流会や討論の機会を受け入れ機関のスタッフや村人などと互いに触れ合う機会を持っています。しかし大局的に見れば、経済的に豊かな側が学んで帰るのであって、受け入れ先や訪問先の相手に同様な機会をほとんど提供できずにいます。

今年のバングラデシュの短期FSで、今日ゲストで来ている PAPRI を通じて訪問した村の少女グループの一人が、「私たちも将来、あなたたちを日本に訪問できるかしら？」という質問をしました。その際ある学生が気軽に「そうなるよ」と答えたものの、後で現実的に考えてしきりに反省していました。

受け入れ側の人たちが同様な体験を得る機会を、もう少し積極的に設けるべきではないでしょうか？そうでないと、教育の機会、情報の流れの差が、一層大きくなっ



バングラデシュ短期FS：ダッカ市内のスラムの家庭を訪問する。

てしまうからです。しかしそのための費用は、馬鹿になりません。それを、当初からコストとして大学や参加者が負担してプールするのも一案です。その場合その負担を、関係者はどのような割合で引き受けるべきでしょうか？

(3) 社会的・文化的影響

外国人の訪問は、受け入れ先の寛容の精神やホスピタリティで、温かく迎えられています。しかし例外もあります。

例えばバングラデシュのビハール難民キャンプを訪れた際に、「物見遊山に来たのか？あなたたちが来ても私たちの状況は変わらない」と非難の言葉を浴びたことが数度あります。またストリートチルドレンたちを外国人の私たちが集団で訪問することで、周囲から誤解されたり妬みを買ったりすることがないか、ということも気にしています。

つまり貧困や人権侵害、環境破壊など相手社会のネガティブな面に外国人が大勢で触れる場合には、その当事者や周辺の人々から、好ましく思われなかったり、マイナスの反響が生まれる危険性があることに、私たちはより敏感であるべきだと思います。もっとも「だから訪問をするな」と言っているわけではありません。体験学習の内容を企画する私たちが、海外であるがゆえに見落としやすいこうした点を充分自覚し、学生たちにそれをも伝え、必要な準備や望まれる行動を行うことが重要だ、と主張しているのです。

3. 恵泉女学園大学の対応

恵泉女学園大学の長期FSは、こうした二つの非対称性について、プログラムを開始した当初からのカウンターパートであり、今日のシンポジストでもあるドウシット先生と話し合いを行い、充分とは言えないものの、以下のように対応してきました。

長期FSの学生の受け入れ先は、原則としてチェンマイ大学教育学部大学院ノンフォーマル教育研究科と関係があるNGOや村に限定し、実費を除いて無償で受け入れをお願いしています。その代わりに意味を込めて、毎年恵泉女学園大学が20万円ほどを拠出し、また教職員や参加学生も寄付をして、チェンマイ大学側でプールし適宜活用しています。具体的には、受け入れ先のNGOや村人が、会議や研修、見学を行う費用に充てています。例えばこれまでに3回、計7人の現地NGOスタッフや村人、院生が、私が担当しているバングラデシュ短期FSにタイから参加されました。この資金で、タイ長期FSの受け入れ側の関係者はカンボジアや日本にも出かけています。

つまり「有償と無償の非対称性」を逆手にとって、一つのファンドを作り、それを活用することでもう一つの「機会の非対称性」も少しは解消するよう努めてきました。

4. 今日のシンポジウムに期待すること

今日のシンポジストの方たちは、長い間にわたって私たちのFSの受け入れ側の組織の要にいる方や、受け入れを実際に担当してくださった方です。恵泉女学園大学だけでなく、他の大学やグループも受け入れておられると推察します。ですから私たちが実施する体験学習が、受け入れ側でどのようなインパクトを生み出してきたのかを語るのに、最適の方々である。ポジティブなインパクトについて、私たちがこれまで気づいていない点を、ぜひ教えていただきたいと思っています。そうした点を、今後も伸ばしていくためです。しかしできましたら、より語られることが少ないネガティブな点について、遠慮なく、率直にご指



ドイツ・オランダ短期 FS：オランダのフロニンゲンのマティーニ教会のパイプオルガン（1481年製作）を奏でる。

摘ください。そうした点を共有したほうが、その問題をすぐには解決できないとしても、長続きする関係を構築できるし、他の大学や受け入れ団体のためにもなるからです。

日本で海外体験学習を実施している複数の大学で作っている「大学教育における海外体験学習研究会」で受け入れ側の視点の話題になったときに、こうした点をあまり考えてこなかったという反応がありました。特にプログラムにボランティア的な趣きが強い場合、この点が見えにくいようです。私はこれを「善意は御し難い」と表現しています。こちらの善意意識が強いと、相手、特に最も弱い立場にいて見えにくい人の立場に立って考えることが難しくなり、独善的に陥りがちになるということです。

他方これは「学習者中心主義」の問題、という指摘もありました。教育学上の「学習者中心主義」を巡る論議はさておき、強い経済力を背景に経済力の弱い外国で体験学習を実施しているということ、そして異文化、異言語間のコミュニケーションは容易でないということに、私たちは一層の注意を払い、「教育のため」を錦の御旗、つまり正当化の理由にしないようにすることが重要だと思います。

今日のこのシンポジウムは、文部科学省の「特色ある大学教育支援プログラム(特色GP)」の補助を受けて実施するものです。日本でこれまであまり語られてこなかった面に光を当て、新たな一歩を踏み出すという意味において Good Practice 的なものになることを願ってやみません。

Keynote Speech (Summary)

Keisen University **OHASHI Masaaki**



While there clearly have been some positive impacts from our Overseas Experimental Studies (known as Field Studies/FS in Keisen) on hosts, I cannot but suspect that there are also negative impacts in the sense of burdens and sacrifices being forced upon host organizations, local societies and certain individuals. I am particularly concerned about the following three issues that may lead to negative impacts.

1. Asymmetry between the paid and the generous

Universities sending their students abroad receive appropriate compensation in the form of school fees and other payments from participating students. When we conduct an overseas program, the payments to travel agencies, hotels, restaurants, and for transportation, etc., are duly paid.

In contrast, we are often entertained with low-priced, if not totally free, services from host institutions and individuals. These donors can be local NGOs, members of host-stay families in villages, as well as staff members of host institutions. They include, for example, NGOs working for social development and/or environment conservation using public funds. In many cases those NGOs redirect scarce resources, such as money, labour and time, to assist our educational programs.

Needless to say, these institutions and individuals are extremely kind and generous in offering those low-fee or free services to us, and we should appreciate that. But as mentioned, we duly receive fees and costs from our students as well as wages and allowances from university authorities. To elaborate further, these recurrent asymmetries exist not only between us and these local hosts, but also between travel-related commercial organizations and the local hosts.

I would like to suggest that we try to be more aware of these asymmetries.

2. Asymmetry of opportunities between haves and have-nots

In the Overseas Experimental Study program, our students learn a lot through a variety of exchanges with host institutions and local people. But in general, it is one way exchange. Our students alone have such opportunities, while especially in economically poor countries they are completely lacking or only available to a small group of selected students. Should we now deliberately design opportunities for those on the host side to be able to learn overseas?

第1部

長期フィールドスタディ

3. Social and cultural influence

When foreigners visit a society in large numbers to see its negative side (slums, refugee camps, etc.), there is a possibility that the visitors will be regarded unfavorably, leading to a negative situation that arouses hostility and antagonism. We should be more sensitive to this. In particular, it is important for the planners of the Overseas Experimental Study program to be fully aware that this is often overlooked, and to convey this to the students, make necessary preparations, and take the desired actions.

Further, there is a fundamental problem in that when we see ourselves as volunteers, it becomes difficult to put ourselves in the shoes of the other side, and we can become self-righteous. It is also important for us to try not to justify everything by relying on the cause of “education.”

Incidentally, for Keisen University's long-term Field Studies in Thailand, we established and operate an NGO fund with the aim to solve the first and second problems I mentioned above. We have been utilizing this fund effectively by, for example, allowing Thai staff and students to participate in a short-term Field Study program that we conduct in Bangladesh.

At this symposium today, I hope that we will be able to vigorously discuss the positive and negative aspects that we are not usually conscious of. By sharing these issues and making efforts from both sides to solve problems when they arise, I am convinced that we will be able to build a long-lasting relationship that can work in the interests of both universities and the host organizations.

長期フィールドスタディの概略

恵泉女学園大学人間社会学部国際社会学科教授
体験学習 CSL・FS 委員長

上村 英明

UEMURA Hideaki



皆さん、こんにちは。まずは体験学習 CSL・FS 委員長として、今日のゲストの方々にあらためてお礼を申し上げます。

私がこの大学に就任したのは2002年ですので、今年（2007年）で5年目になります。私の専門のひとつは国際人権論ですが、大橋先生にこのフィールドスタディの仕事に参加するよう呼ばれ、さらに体験学習 CSL・FS 委員会の委員長として引き継ぎをしなければいけないことになり、かなり戸惑いました。

人権問題は、例えば、差別をされている側のエンパワーだけでなく、差別をしている側が差別をされている側を理解することが問題解決に不可欠です。しかし、差別をされている人たちの理解をどう進められるかという、状況は決して簡単ではありません。有償とか無償、それから非対称性の問題もありますが、さらに2つの目線の問題について指摘したいと思います。

1つは、問題を抱えた人たちを見下してしまう、つまり自分は高いところにいるのだという目線を持ってしまう場合です。その目線では、有利な立場に立って学んであげましょう、話を聞いてあげましょうというある種の傲慢な姿勢が、どこか行動やしぐさ、表情などに出てしまいます。こうした傲慢な姿勢が相手にどういう影響を与えるのかという問題は決して小さなことではありません。

もう1点は、逆の場合ですが、自分は差別する側なのだということを意識し過ぎると、ものすごく卑屈になります。相手の言っていることは何でも正しいし、その社会の中に自分が負うべき問題ばかりを見つけようとしします。

これら2つの視点は、いずれも目線が対等ではないところに共通項があり、問題があります。そうした問題を抱える分野にいたものですから、私もこの仕事に参加するようになった時あるいは引き継げと言われた時に、大学生にそうした問題を理解し、解決できるプログラムを提供できるのかと非常に疑問に思いました。

改めて確認しますが、これからお話をする長期フィールドスタディは、本学の大橋先生とチェンマイ大学のドゥシット先生が大変工夫をされたプログラムです。私もこの長期フィールドスタディに関わり、プログラムの発展に努力しながらこの5年間やってきましたが、私が参加した時にはプログラムの基本はきちんとできておりましたし、先のような疑問を持っていた私の目からみても、改善の余地があるとはいえ、極めて工夫されたプログラムだと思います。

具体的には、長期 FS の第6期行動表を少し説明してから、後のドゥシット先生のお話につなげたいと思います。

まず、タイ国チェンマイで実施される長期フィールドスタディに参加する前に、「社会調査方法論Ⅱ」という科目で半年間、学内で事前学習を実施します。そして、8月末にはタイ

北部の都市チェンマイに出発し、到着後はいろいろなタイプのプログラムを現地で実施します。最初のステップは、9月から始まるチェンマイ大学における講義プログラムです。1つは、現地でタイ語をもう一度きちんと勉強し直します。もう1つは、タイ社会についてさまざまな視点から講義を受けます。タイの歴史、つまり相手の社会がどうやって今ここに成り立ったのかという歴史の勉強から始まり、タイの文化や社会とその問題、教育、女性の地位、エイズ、それから仏教の役割、農村社会の問題といったことをチェンマイ大学でそれぞれの専門家の方から学びます。

また、直接いろいろな体験学習先に行くのではなく、事前のホームステイプログラムがあります。タイの学生宅でのホームステイ、さらに、農村や山岳民族の村でのホームステイを行いながら、自分はどのような問題に関心があるのか、あるいは体験学習できるのかということ調整していきます。

そして、10月下旬からようやく体験学習第1期がスタートします。体験学習は、3つの時期に分けられており、第1期、第2期、第3期のそれぞれの時期の終わりにチェンマイ大学に戻り、体験学習の報告会が実施されます。この報告会では、学生の発表の後、学んだ意味は何だったのか、どう直面した問題を解決すればよいのか、あるいは何がその原因かなどについて、チェンマイ大学側の教員やプログラムをサポートしていただいているNGOのスタッフから助言を受けます。来週は私がチェンマイに行く予定になっていますが、恵泉からも教員が報告会ごとに参加して学生の発表を聞き、恵泉側の教員としてアドバイスを与えます。そして第3期を終えて、1月末に全体的な成果として最終レポートをまとめるという形でプログラムは基本的に終了します。

こうした体験学習の報告会では恵泉の教員も参加して意見を述べますが、ドゥシット先生はじめ現地の先生方、あるいはNGOの方たちのアドバイスを中心に、学生たちは体験学習をまとめていきます。

私からは、ドゥシット先生の話の前提として、とくに以上の点をご紹介しておきたいと思います。どうもありがとうございました。

第6期長期タイFS行動表

2005. 8. 26 ~ 2006. 1. 31

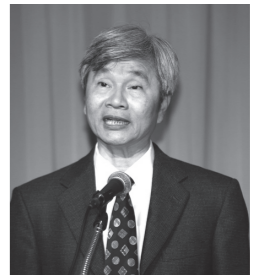
8	タイ語 TYAP訪問	12	2
26	タイ・チェンマイへ (ユニサーブ)	27	3
27	FSオリエンテーション合宿 (1泊2日)	28	4
28	講義⑤仏教	29	5
29	CMUオリエンテーション	30	6
30	タイ語	31	7
31	講義①タイ歴史	1	8
1	講義②タイ文化・社会	2	9
2	講義③タイ文化・社会	3	10
3	講義④山岳民族	4	11
4	ホームステイのオリエンテーション	5	12
5	体験学習インシユ発表	6	13
6	講義⑤教育・女性・エイズ	7	14
7	講義⑥教育・女性・エイズ	8	15
8	講義⑦教育・女性・エイズ	9	16
9	タイ学生宅ホームステイ面接	10	17
10	2泊3日	11	18
11	山岳民族の村ホームステイ	12	19
12	(パヨーイ村)3泊4日	13	20
13	森林島施設でまとめ	14	21
14	チェンマイへ	15	22
15	マクケン訪問	16	23
16	ランナーカエ訪問	17	24
17	講義⑧農村社会	18	25
18	ウェンビンホーム訪問	19	26
19	体験学習準備期間 (打ち合わせ)	20	27
20	農村(バンラオ村)ホームステイ	21	28
21	2泊3日	22	29
22	MRIORH訪問	23	30
23	チェンライフィールドトリップ	24	1
24	ミラーアートグループ訪問	25	2
25	TRAFPOD訪問	26	3
26	コーヒーのワークショップ	27	4
27	体験学習オリエンテーション	28	5
28	1期スタート (18日間)	29	6
29		30	7
30		31	8
31			9

恵泉長期FSプログラムにおける受け入れ先および受け入れ機関におけるさまざまな影響

チェンマイ大学教育学部教授
恵泉女学園大学大学院兼任講師
長期FSプログラム現地受け入れ総責任者

ドゥシット・ドゥアンサー

Dusit Duangsa, Dr.



皆さん、こんにちは。今日私が国際シンポジウム「海外体験学習における受入側のインパクト」のシンポジストとしてここに立つことを大変光栄に思います。

恵泉女学園大学の長期フィールドスタディに参加する学生をチェンマイ大学が受け入れて8年が経過しました。現在(2007年11月現在)10名の8期生がタイのNGOや村で体験学習を実施しているところです。

本日、私は次の2点を中心に述べます。1点目は、恵泉女学園大学の長期フィールドスタディは参加学生にどのような影響を与えたのかについて、2点目は長期フィールドスタディに参加した学生たちは、学生たちを受け入れた村やNGOなどの機関にどのような影響を与えたかについてです。

その前にまず、タイで5ヶ月間にわたって実施される長期フィールドスタディプログラムではどんなことを学んでいるのか皆さんに紹介しましょう。

1. 長期フィールドスタディプログラムの6つの活動

長期フィールドスタディでの活動は主に6つに分けられます。(図1)

第1の活動はタイ語学習です。約1ヵ月間、毎日、タイ人のネイティブの先生についてタイ語を学びます。できるだけタイ語を早く習得するように学生5人に対して1人の教師が担当します。タイ現地での集中したタイ語学習の目的は、学生たちが村を訪れたりNGOで体験学習する際に基本的なコミュニケーションをとれるようにすることです。タイ語はある程度恵泉で学んでいますので、タイではそれをさらにブラッシュアップします。

第2の活動は、タイ人の学生の家庭でのホームステイです。このホームステイプログラムを通して、恵泉の学生たちはタイの一般の家庭での生活

図1 長期FSの6つの活動と期間



習慣を知ることができます。

第3の活動は、タイ社会を理解するための講義です。タイの歴史、文化や社会構造、価値観、信仰、教育、芸術、タイ社会におけるジェンダー、女性問題、エイズ問題、子どもや山岳民族に関するテーマや、現代的なテーマなども取り上げて学びます。

第4の活動は、チェンマイ大学で座学をしている期間に、約10か所のNGOを訪問することです。

そして第5の活動は、タイの伝統的な農村とカレン

族の村への訪問、恵泉フィールドトリップと呼ぶフィールドビジットを実施することです。

図2には長期フィールドスタディプログラムのすべてのプロセスが記されています。すなわち、第1のタイ語学習から、最後の第6のNGOや村での体験学習にいたるまでのプロセスです。長期フィールドスタディの第1から第5までの活動プロセスは学生がタイに到着した9月から10月にかけて行う事前学習です。この約2か月の事前学習を経てから、学生たちは第6の活動である体験学習に入るのです。

2. 長期フィールドスタディにおける学生たちの学び

では次に学生たちは、こうした活動を通してどのようなことを学んだのかを申し上げます。学生たちの学びは5点にまとめることができます。

第1は、文化的なセンシビリティ（感受性）です。まず恵泉の学生には観光でものめずらしいものをカメラに収めていくだけの観光客とは違って、文化的なセンシビリティを理解します。タイ滞在中にタイ人の大学生の家庭にホームステイしたり、講義をしてくださる先生方との交流、農村訪問や2ヵ月半の体験学習などさまざまな活動に参加し、多くの人々と交流する活動がこうした文化的なセンシビリティの理解を促進します。

私が外国からやってくる学生にもっともしてほしいことは、村の人々をまるで動物を見るような目で見ることです。例えば、タイ北部のミャンマーとの国境地帯に住む首が長い山岳民族を見て、自分とは違う人間だとか、奇異なものを見るような目で見ることを好みません。

図2 長期FSの6つの活動



出所) ドウシット・ドゥアンサー



長期FS：タイの上座部仏教を学んだ。



長期FS：カレンの人々とのやりとりから異文化の理解を深める。

長期フィールドスタディの学生は自分の関心テーマを体験的に学ぶ2ヵ月半の体験学習の期間で、物事をより深く理解し、全体的なつながりを理解するようになり、それによりこの体験学習が学生たちにとって価値のあるものとなると考えます。

さらに恵泉の学生がNGOや村で2ヵ月半の体験学習をしている間、NGOや村のコミュニティの人々も、異なる文化的背景をもつ学生たちから学ぶことができます。つまり双方が学びあうことが可能なのです。

第2は、違いに対する深い理解です。文化の違いとは、たとえばスポーツに例えることができるでしょう。バスケットボールとサッカーはそれぞれの起源とルールをもつ違ったスポーツです。バスケットボールの競技ではサッカーボールを使用しないし、サッカーの試合にバスケットボールのルールは使用しません。なぜ使用しないのかを問い詰めることはナンセンスです。違うスポーツなのですから。このように異文化を学ぶということは、互いの文化を比較することではなく、その文化の違いを理解することなのです。

第3は、違いを越えた学び（Cross-Cultural Learning）です。学生たちは、言語や服装、価値観、生活様式がたとえ自分の文化と異なっていたとしても、その違いを越えて、異文化の人々も自分と同じように希望、愛情、人類への思いなどをもっていることを理解します。私は違いの中にこそ接点があると考えています。学生たちが、世界はひとつ、同じ人類なのだを認識することができると思っています。

第4は、チェンマイでの5か月の滞在、特にNGOや村での体験学習の2ヵ月半に、学生たちが自分自身を見つめ、発展させる術、すなわちライフスキル（Life Skill）を身につけることです。体験学習期間中、日本から教職員が学生の指導にやってきました、タイ駐在の教員が折々に学生の指導や相談にのっていますが、学生は体験学習実践地において、NGOや村など異なる環境で人間関係を構築しながら学びを深めます。こうして学生たちはライフスキルを身につけます。これは自分の中に自信を生み出すプロセスとなります。

最後の第5点目です。このようなさまざまな活動やカリキュラムを通じて、まず個人という観点から学生たちは本来の自分自身を見つめることができると考えます。これは目の前の作業をこなしていくことを可能とすることで、さらに社会的な観点からは、出身の社会に対して再評価、つまり日本のことをもっと誇りに思うようになることなのでしょう。なぜなら、異文化に接するということは、自らの文化を再認識する作用をもつからです。私たちは、ほかの文化に接するごとに、より一層自らの文化を自覚するようになると考えています。

3. 長期フィールドスタディプログラムが村や NGO に与えた影響

次に恵泉女学園大学の長期フィールドスタディプログラムが村と NGO にはどのように影響を与えたかというテーマについて、私は、先ほど大橋先生がオープニングのときにおっしゃった中からいくつかの項目をお借りして、もう一度考えたいと思います。

第1は「機会の非対称性」についてです。長期フィールドスタディにおける恵泉側、そしてチェンマイ大学側の交流は一方通行的なものでしょうか。

8年間この長期フィールドスタディを運営してきました。恵泉からは毎年10から15人の学生たちが長期FSに参加します。一方、この8年間でこれまでチェンマイ大学から恵泉に留学したタイ人は1人、これまで日本の学生を受け入れたことのあるタイの村や NGO から日本の学生と一緒にバンングラデシュでのフィールドスタディに同行したタイ人は全部で9人、また、恵泉の受け入れで短期で日本に来たタイ人はこの8年間で2人です。数字だけ見るとバランスが取れていないと思うでしょうけれども、こうした費用はすべて恵泉が出しているのです。これも一方通行です。そのことも忘れてはいけません。

バンングラデシュでのフィールドスタディに参加したり、日本で学ぶなどの経験は、タイ人の学生や村の指導者、NGOにとって大変貴重な経験です。チェンマイ大学やタイの政府にはこのような交流に対する支援がありません。要するに、交流する数だけを取り上げて一方通行の関係であるというより、活動する人の質についても考慮するべきであると思います。

では、村人や NGO にとって日本の大学生たちが来ることは重荷になるのでしょうか。この質問に答える前にある学生の体験学習中の写真をご覧ください。(ページ下2枚の写真参照)。

これは2005年の長期フィールドスタディに参加した寺岡久美子さんという学生が、マッケンリハビリテーションセンターで体験学習をしたときの写真です。この写真は、寺岡さんが元ハンセン病で現在高齢者である患者さんの体を拭いたり、着替えの手伝いをしたりしている写真です。彼女が私にこの写真を見せながら話を聞かせてくれたときに、私は自分のことを振り返ってこう考えました。55歳の私は、彼女と同じ行為はできないでしょう。その病気が感染しないと知っていても、患者さんの痛みや苦しみに接したくないからです。



バンングラデシュ短期FS：少数民族トリプラの焼畑混合農業の畑を恵泉の学生と長期FSでお世話になったタイのNGOの人々と視察した。



長期FS：元ハンセン病の高齢者と共に。



長期FS：体を拭いた後、向きを変えてパウダーを体にぬる。

私は、彼女が今回の体験学習によって自分を見つけたと信じています。学生の中には NGO のスタッフに面倒な思いをさせる人もいるかもしれませんが、以下のことを学生が勉強したり組織的に準備したりすることによって、相手に嫌な思いを与えることを軽減することができます。

まず、学生たちが体験学習に来る前に事前授業で準備することが必要です。事前授業の内容は、1つはタイ語学習です。タイ語はお互いにコミュニケーションをとることを促進するからです。もう1つは、地域の文化や伝統を学び、理解してくるということです。

次に、学生たちと一緒に行動する現地でのコーディネーターを大学側が配置させることが大事です。受け入れ側の機関は、学生の学びや体験学習のことしか教えることができないのです。学生たちの身の回りの世話や個人的な悩みのことなどを見ることはできません。私たち受け入れ側の機関は旅行代理店ではありませんからその点を配慮していただきたいと思います。

4. 良好な関係を発展継続するために

長期FSプログラムが終了した後も、学生を送る側つまり大学側と、NGO、そして村との関係を継続していくことが必要です。このような活動を支えるために、恵泉女学園大学とチェンマイ大学は共同で NGO 基金を立ち上げています。この基金による資金はタイの NGO のスタッフを恵泉女学園大学のバンングラデシュフィールドスタディに参加させたり、チェンマイ大学でのセミナーや会議に NGO や村人を参加させるために活用しています。

また、安全性の確保も双方にとって重要な点です。チェンマイ大学と受け入れ側は、学生たちがタイにいる間の身の安全を常に考えています。なぜなら、学生が重大な事故や病気に見舞われれば、学生の家族にご心配をかけるだけでなく、大学間の問題となり、最悪の場合は国際問題に発展することにもなるだろうと考えているからです。

最後にこの長期FSは、経済的に力のある国が自分の思い通りにすることができるということを示しているのでしょうか。どのように答えたらいいかわかりませんが、人それぞれの考え方や経験、世界に対する見方によってその回答は違うでしょう。

この問いに対して最後にタイで実施する恵泉女学園大学の長期フィールドスタディについて3つのコメントを述べたいと思います。

1つ目のコメントはチェンマイ大学教育学部は海外の7つの大学とタイで教育プログラムを実践していますが、その中で恵泉女学園大学とのプログラムが上記の問いにもっとも回答しやすい位置にあるということです。

2つ目のコメントです。私は、ノンフォーマル教育、つまりフィールド（現場）での研究を専門とする教師で、地域の共同体やコミュニティーの知恵やコミュニティーの力などに関心があります。つまりローカルコミュニティーへの強い思いを持っています。しかし、同時にグローバルなコミュニティーも大切だと思っています。みんながお互いのことを知り、交流を通じてお互いのことを勉強することが大事だと考えています。

3つ目のコメントです。この恵泉の長期フィールドスタディがうまくいくように、学生たちがタイのコミュニティーの伝統的な文化などを理解し、譲り合い、コミュニティーを尊重できるように私たちはプログラム計画最初からいろいろ考えて、この長期FSの活動の計画を立ててきました。

これらの3つのコメントは、先の質問に対する答えとなっているかどうか、私は適切な答えを見つけることができません。説明していても何も述べていないように聞こえることでしょう。答えは皆さんにそれぞれ考えていただきたいと思っています。

以上で終わります。ご静聴ありがとうございました。

Various kinds of Impacts on the Hosts and Hosting Institutions of the Keisen University Long-term Field Study Program (Summary)

Chiangmai University *Dusit Duangsa Dr.*



Chiangmai University (CMU) in Thailand has been hosting the long-term field study program from Keisen University for eight years. Today, I would like first to briefly introduce the contents of the long-term field study program carried out in Thailand for five months, and then report on the effects that this program has had on the participating students and on the villages and NGOs that hosted the students.

Keisen University students participate in six main activities during their five-month stay in Thailand. The first is study of the Thai language, which takes approximately one month. The second activity is a home stay at the home of a Thai family. The third activity is a series of lectures to understand Thai society by studying themes such as the history of Thailand, culture and social structure, values, religion, education, arts, gender in Thai society, women's issues, AIDS, children, and highland indigenous peoples. The fourth and fifth activities are visits to NGOs and to two villages: a traditional rural village and a Karen village. And the sixth and final activity, based on the preparations gained through the first five, is the main activity of learning through a two-and-a-half month experience in villages or NGOs.

Through these activities, students attain: (1) cultural sensitivity and mutual understanding, (2) a deeper understanding of different cultures, (3) Cross-Cultural Learning, (4) self reflection and self-enlightenment, and (5) a reevaluation of their own selves and their own society and culture.

Is the relationship between Keisen University and CMU a one-way relationship? While CMU hosts about ten students from Keisen University each year, only about ten Thai villagers and students have been involved in the programs during the eight years, having the opportunity to accompany Keisen University students to Bangladesh in the short-term FS there or to visit or study in Japan. The numbers are not equal but this is still significant in a qualitative sense.

To mitigate the burden on the hosts, we need to strengthen, in particular, the study of the Thai language for communication and pre-visit study for understanding the local society and traditional culture of the people that the students visit. We should also have field coordinators to give daily life instruction to students on the spot and to make necessary arrangements.

In order to continue to maintain our good relationship, it is important to ensure the proper operation of the NGO fund so that the villages and organizations hosting students can benefit.

恵泉長期 FS 学生によってもたらされた パンラオ村と村人に対する影響^(注1)

メーカオトム・エイズコーディネーションセンター代表
チェンライ県パンラオ村元小学校教員 **スマリー・ワナラット**

Sumalee Wanarat



コンニチハ。日本語でみなさんにお話をしたいのですが、緊張をほぐすためにタイ語で話します。

わたしは、恵泉の長期フィールドスタディに参加する学生たちの農村フィールド訪問プログラムを受け入れるパンラオ村側の代表として今日ここに立っております。恵泉からの学生の訪問ではどのようなプログラムを実施して、私たち受け入れ側はどのようなインパクトを受けたかを大きく4つの項目について報告します。

1. 受け入れ側の村人の変化

まず最初に、日本人の学生が体験学習に来ると聞いて、村人たちが最初にどんなふうに反応したのか述べます。

村人たちは日本の大学生が村にやってくることを聞くと、「何人来るのか」「何日滞在するのか」「村に何をしに来るのか」と素朴な疑問をぶつけてきました。そして次に不安を訴える質問が彼ら彼女らから寄せられました。「日本人の大学生たちにどのように接すればいいのか」「日本人は豊かな国で困らない生活を送っているのに、こんな不便なところに滞在することができるのだろうか」「食べ物はどうなものを調理すればいいのか」「ふだんの料理でいいのか、「自分たちが使っている寝具で寝ることができるのか」と村人たちは不安でいっぱいになります。そのなかでも一番の心配は、日本語のできない村人たちは日本人とどのようにコミュニケーションを取ったらいいのか、ということでした。それまで、外国人が村に来て、ホームステイをさせた経験がまったくなかったからです。

けれども、日本人の学生たちが村にやってくる回数が増えることで村人の不安は次第に消え、逆にそれまでの不安は、学生たちが村にやってくる日を楽しみに思う気持ちに変化したと私は感じました。「学生たちは今度いつ来るの」と、いつも聞いてくるようになりました。

毎回違う学生たちが来ても、村人はそれぞれの日本人の学生らを自分の子供や孫のように思い、世話をします。村人の中には、「日本の娘からだよ」と言って日本に帰国した学生からの写真やお土産、たどたどしいタイ語の文字の手紙などを村人みんなに見せたり、話を聞かせたりしている人もいます。今日、この会場にかつて私の村を訪問された卒業生が何人かいらっしゃっていますが、みなさんのことを村人は待っていますよ、と伝えたいです。

注1. 今回の国際シンポジウムでは受け入れ側のインパクトと言ったとき、主催者側は受け入れ側というのは1つではなく、いくつもの層に分けて考えている。特に長期フィールドスタディは、恵泉女学園大学とチェンマイ大学という、大学と大学が協定を結んでそこで交流をしているほか、チェンマイ大学が連絡調整(コーディネイト)をする村やNGOの存在がある。チェンマイ大学がコーディネートし、学生が訪問する村のひとつがチェンライ県メーカオトム郡パンラオ村である。パンラオ村には、恵泉の長期フィールドスタディの学生たちが毎年、体験学習に入る前に農村のフィールドビジットとして2泊3日の滞在をして農村の生活から様々なことを学ぶ。スマリーさんはこのパンラオ村のリーダー的存在である。

2. 村での活動

次に、学生と村人との交流、村での活動を通じた学生たちの学びについて述べます。

(1) 客人を歓迎する伝統儀式 (写真1)

写真1をご覧ください。これは村に伝わる伝統儀式のひとつで、村に客人を迎える際に行うバイシー・スー・クワンという儀式です。体の安全の祈願や魔よけの意味があり、村に来た人のために行う歓迎の儀式です。村の長老たちが学生の手首に白い木綿糸を巻きます。

学生たちはそれぞれの関心を持って村にやってきます。学生が高い関心を示すのは、村人の生活習慣や伝統のこと、そして日常生活です。学生がこうした村の日常の事柄に関心をもっていると知ると、村人たちの不安はだんだんと解消していきます。日常と同じ生活で接すればよいとわかるからです。

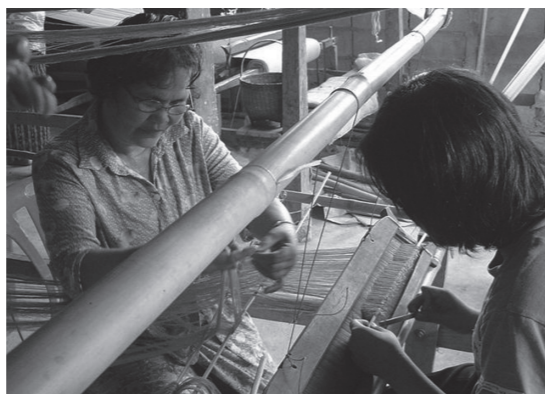
村人は学生たちと一緒に実際にいろいろなことを実践します。とくに客人を迎えるこうした歓迎の伝統儀式の場を村人が設定することは、互いに理解しあう人間関係をつくるために大変よい機会となります。そのほか村には大事な儀式が多くあります。学生たちが村に滞在している間に、例えばタンブン（功德を積む）、お葬式や結婚式、新築祝いなどをたまたま行っていたら、参加することも可能です。



タイ長期FS:村人は歓迎の儀式で学生たちを迎える。(写真1)

(2) 村における生計手段を学ぶ (写真2)

そのほかに学生が関心をもつのは、日常生活に関することです。それぞれの村によって異なる伝統や習慣を実際に体験することです。例えば、服装、養蚕のためのクワの木の栽培やカイコを育てること、機織物、草木染め、ござを織ること、竹細工、調理、民間療法などを勉強します。地域の食文化や村にあるさまざまな生計手段を学びます。



タイ長期FS:村人の女性から機織りを学ぶ。(写真2)

(3) 小学校で子どもたちと交流

村には小学校がありますので、学生が村に滞在している間に学校の先生や子供たちと一緒に活動する機会を設けます。ちょうど学生が学校訪問を行っているとき、放課後に小学校に行くと、子供たちが日本語の歌を歌っている歌声が聞こえてきます。時には学生たちに子供たちが片言の日本語でこんにちはとあいさつしたり、簡単なことを言ったりします。それは、体験学習の学生たちが外の文化（日本語）などを村に持ち込んだということを表しています。

(4) 村人との文化交流

これは現在、体験学習を行っている学生たちの写真（写真3）です。浴衣を着て日本の歌を歌ってくれました。この催しものを開催したとき、近隣の30から40カ所の村の人たちが私たちの村にやってきました。こうした機会を通じて、村に隣人がやってきたり、隣人たちが日本について知る機会にもなっています。ほかの村から来た人たちも、この学生たちはどのようにこの村に来たのか、誰が連れてきたのかなどの質問をしてゆきます。



タイ長期FS:村で文化交流を催した。(写真3)

日本の学生が村に滞在するという事は、ひとつの村だけに影響を与えるのではなく、他の村にも影響を与えます。

この催しは、村人と学生が互いに学びあう機会を提供しています。タイ語と日本語の通訳をしてくださる先生が中に入って、村人と学生が意見を交換し、話し合いをすることができます。学生も村人もお互いに知りたいことを聞くことができます。この場でいろいろな勉強ができます。そうすることで、お互い知り合う機会をより設けることができます。

3. 滞在した村へのポジティブなインパクトとネガティブなインパクト

さてここで、皆さんが村に来たことによって、村にどのような影響を与えたかを説明したいと思います。

第1に村人が昔から続けてきたことや習慣や伝統に対して、村人はあまりにもあたりまえすぎてこうした伝統的な知恵に特別な価値を見出さなくなりがちでした。しかし、外国から学生が村にやってきて、伝統的なことがらに関心をもつようになってはじめて、伝統的なものに対する価値を再評価するようになりました。今では、村人たちはそれをタイ人の子孫だけでなく、ほかの国の人たちにも伝えていくべきだということに気づいています。ですから、村人たちはそうした伝統を守り、継承し、同時に他の人に伝えていかなければならないと思うようになりました。

第2に、一般的に村人は、教育は学校の中だけのことで、自分には関係がないと思いがちです。でも、学生たちが来てくれたことによって、教育は学校や大学だけで行うのではなく、どこでもできることだと分かるようになりました。村人でも先生になることができるし、村自体が勉強の場となることが分かりました。

第3に、村人は、言葉や文化の違いは互いに学ぶことの妨げにならないことが分かりました。実際に体験をすることでお互いに学びあうことができます。

第4は、それぞれの学生たちが持っている関心は違うために、関心に沿っていろいろな村に行って学んだことや、経験したことを学生同士、または学生と村人が話し合うことができたということです。

最後に村人は、自分がかく普通だと思っていた生活が外の人から見て価値のあるものだと気づき、それを村人たちは誇りに思い、幸せに感じています。

以上のことだけでしたら、ポジティブなことしかないと思われるかもしれませんが、ネガティブなインパクトもあります。

それは、学生たちは村に来たことによって、村のことを勉強する一方で、価値観や商品などを外から持ち込みました。例えば、村人と違う服装や髪形、髪の色、カメラ、携帯用オーディオ機器などの電気製品を持っていったりすると、村人の中でも、特に10代の若い世代に大きな影響を与えます。

この10年間で村での体験学習は村人と学生たちが共に学びあうことがたくさんありましたが、これまでの関係をさらに発展させるために提言したいと思います。

私は村からの代表として、これまでの恵泉の学生とパンラオ村の村人たちの交流や学びの機会を恵泉女学園大学とチェンマイ大学双方が認識することが大事かと思えます。学生と村人、そして2つの大学という4者が顔を合わせる場を設定し、互いの意見交換をしたらいかがでしょうか。この点を改善できれば、より大きな成果がもたらされることでしょう。

(司会) ぜひスマリー先生に付け加えてほしかったことがあります。先ほど、ドゥシット先生から恵泉とチェンマイ大学の間でNGO基金をつくったと報告がありました。それを利用して現実的なプロジェクトが実現したのがスマリーさんの村です。村の方たちに何かしたいことがあるか、それに対して恵泉とチェンマイ大学のNGO基金が何か使えないだろうかとお尋ねしました。スマリー先生の村は北部にあります。東北からの移民の方たちが多く、絹織物をつくる人たちがたくさんいます。これを売りたいという声にこたえて、その立ち上げのための資金を提供しました。

スマリー先生は、その成果である絹織物を持ってきてくださいました。長期フィールドスタディに参加した学生たちが外のテントでタイのNGOや村で作成された製品を販売していますので関心のある方はご覧ください。

村人と学生たちがお互いに学び合い刺激合っているけれども、その成果がチェンマイ大学や恵泉、恵泉で学ぶ学生たちになかなか届いていないのではないかと。そういう鋭い指摘は私たちもスマリー先生を招いて初めて知ることが多く、反省させられるところです。



村の女性から伝統料理を習った。



主食のもち木（カオニャオ）を袋につめる。



バナナの葉で作った歓迎の儀式的道具。

Impact on Panglao Village and Villagers of Field Study Visits by Keisen University (Summary)

Representative of Maekhaothom Aids coordination Center, Chiangrai, Thailand **Sumalee Wanarat**



I am a representative from Panglao Village, which acts as a host for the rural village visit program, which is a part of the long-term field study program of Keisen University in Thailand. I would like to talk about the actual situation of the field study program and its impact on the hosting side.

Initially, the villagers were worried about receiving students from Japan but as they went through the experience of receiving students on many occasions, their worries and concerns diminished. The students' stay at villagers' homes begins from a traditional welcoming ritual and then observe the works in the village, learn about the means of livelihood, and engage in cultural exchange and exchanges of views with villagers.

The positive impacts of receiving students from Japan (Keisen University) are: (1) the villagers themselves can reaffirm their own lifestyle and tradition; (2) villagers and students work to increase learning opportunities using the whole village as a classroom; (3) they realize that language differences are not a barrier for learning through experience; and (4) the individual interests of the students lead to mutual learning among students and between students and villagers. The negative impact is that the values and electric products brought in by students stimulate consumer desire, in particular among teenagers, and affect them.

In order to continue and further develop the learning opportunities for students and villagers, it would seem better for both Keisen University and Chiangmai University to be involved in the process.



村の女性の糸まきを学ぶ



第2部

短期フィールドスタディ

(資料)

これまでの長期フィールドスタディ参加学生のレポートタイトル

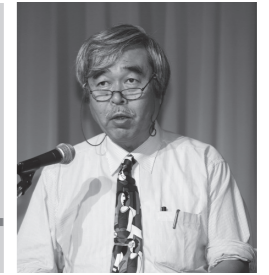
北部タイの文化、知恵、歴史的景観	歴史的環境の保存と地域社会～ワート・ゲート地区の町並み保存活動を通して
	文化の現状と伝承～ランナー文化を通して
	地域の知恵～メーワン川流域地域にある「村人カレッジ」を通じて
	チェンマイの食事情～ギウレーパーバオ村の伝統料理を求めて
山地民族	タイの山地民「生活向上」「文化維持」とは？それに伴う民族のアイデンティティ
	バガニョーとキリスト教の関係～フイトン村からの一考察
	なぜ共同体意識が強いのか モワキ村を通して
	生活環境からの子どもの学び～トゥンルアン村から見えたもの
フェアトレード、タイの一村一品運動	山地民とNGOによる観光開発のあるべきすがた～ミラーが育成したローカルガイドを通して
	タイのフェア・トレードコーヒー Lanna Café を通してみたフェアトレードコーヒー
	OTOPが村人主体で成功している秘訣～ミアン枕を通して
	生産者にとってのフェアトレードコーヒー ITDPの活動からの考察
持続可能な開発、自然資源管理、共有林	有機農業の必要性～村を通して持続可能な社会への構築
	メーガンボン村の参加型開発～水力発電組合の事例を通して
	生活と文化の復興のためのプロジェクト～わたしが考えるこれからの観光
	命のための森と村人の関係～パーサクガム村を通して
地域開発・開発僧	タイにおける大きな民主化の波～北タイコミュニティ・フォレストの歩みと戦い
	タイ開発僧～タイに根ざした仏教による開発僧の教えと実践
教育・障がい者	農村開発～the Foundation of Education and Development for rural area
	タイの教育と人々の思想～メーホンソン県クンユム郡ノンフォーマル教育センターの活動から
	タイの聴覚障害者教育の現状～アヌサーンストーン聴覚教育学校での体験学習を通して
	タイにおける聴覚教育学校（特別教育学校）の意義と役割
公衆衛生・リプロダクティブヘルス	タイにおける傷がい者福祉政策 Yad-Fon Vocational Rehabilitation Center を通じて考える
	ビルマからタイに移動する人々と Maetao Clinic- 例えば女性たちの人口妊娠中絶問題などの考察を含めて
	タイの地域保健医療の現状～チェンライ・メイカオトンの保健所の事例を通して
ハンセン病	タイの家族計画とそれを支える避妊法について～PPATチェンマイの活動を通して
	北タイ Trisapawakam 村でのハンセン病元患者の歩み
HIV/AIDS	北タイにおけるハンセン病元患者の現状～マクケーンリハビリテーションセンターの元患者とその家族から学ぶこと
	タイにおけるセクシャルマイノリティが抱える問題～ HIV/AIDS と社会的差別・偏見
	The Community Care Network- コミュニティレベルでのエイズ孤児に対するアプローチ
	コミュニティ・ケア・ネットワーク ～ エイズの影響を受けた子どもの居場所
ストリートチルドレン	タイ国におけるエイズ教育～チェンライ県メイカオトム郡バンラオ村のエイズ教育から
	HIV/AIDSの蔓延を防ぐための性教育
	タイのチェンマイにおけるストリートチルドレン
	家庭・社会環境が子どもにもたらすもの～子どもの隣で考える
児童労働、人身売買、児童福祉	メーサイの子どもたち～ストリートチルドレンがともに歩む場「子どもの家」
	家庭環境を通してみたストリートチルドレン～彼らが働く理由
	タイにおける児童労働の背景・要因を考える～DEPDCでの体験学習を通して
	人身売買の被害を受けた子ども・女性の帰宅支援～ MRICRH の活動を通して
児童福祉	メコン川流域の子どもが抱える問題～子どもの人身売買被害者と生活して
	少女児童買春の事前防止～ New Life Center の活動を通して
	売春・性的被害から子どもの人権を守る～ Harbor House Foundation から見えたもの

Bangladesh 短期 FS の概要

特色 GP「専門性をもった教養教育としての体験学習」取組担当者
 Bangladesh 短期 FS 担当教員

大橋 正明

OHASHI Masaaki



資料 (P35) Bangladesh 日程表は、2007 年の 7 月 24 日から 8 月 2 日まで Bangladesh で行った短期 FS の日程表です。24 日朝に成田を出発して、タイのバンコクに 1 泊、翌日の午後に Bangladesh の首都ダッカに到着。つまり東京からダッカまで、1 日半かかります。

ダッカ到着の翌日の 26 日午前中、ダッカ市内の国会議事堂、殉教者記念碑、ダッカ大学などを見学しました。これらは、単なる観光、見物ではありません。国会議事堂は、米国の著名な建築家ルイス・カーンがデザインした、20 世紀最大のコンクリート建築物あるいは建築群といわれているものです。殉教者記念碑は、Bangladesh の独立運動の礎である虐殺された 4 人の学生を追慕するところで、デートスポットですが、物乞いもたくさんいます。そしてダッカ大学のカーゾンホールは、イギリス植民地時代の支配の象徴であり、ムガール様式とイギリス調が交じり合った古いレンガ建ての建物で、ダッカ大学の学生たちと恵泉の学生たちとで、短い間ですが話し合いをしました。午後からはストリートチルドレン関連の NGO の活動を 2 カ所見学しました。

続く 27 日から 30 日は 3 泊 4 日で、PAPRI という現地 NGO を通じて農村開発の様子を見学しました。この PAPRI は、今日の海外ゲストであるバセッドさんが率いています。27 日に、ダッカから 70 から 80 キロ離れた PAPRI にお伺いしました。PAPRI と私たちの関係は、PAPRI の生みの親であるシャプラニールという日本の NGO を通じてのものです。私が担当している Bangladesh でのフィールドスタディ (FS) は、毎年農村での行き先を少しずつ変えており、3 年から 4 年おきに PAPRI にお世話になっています。宿泊は PAPRI の事務所にあるゲストルームを使わせていただきました。

そこに 1 泊した 28 日の朝、私たちが購入した山羊の屠殺を見学しました。これは私の FS では恒例になっています。日本からお土産を持参しないかわりに、現地でお世話になる皆さんに現地では最も高価な山羊肉を食べてもらうためでもあります。目の前で屠られ解体される様子を見る、かつ、ある段階から肉になったその山羊をその日のうちに食べることは、日本の学生にとっては貴重な経験です。

この後、NGO が行っているさまざまな農村開発のための活動を見学しました。例えば PAPRI が支援している貧しい人たちのグループは、定期的に資金を積み立てそれに PAPRI からの拠出を加えて原資を作り、仲間の収入を向上させる事業に融資、いわゆるマイクロクレジットを行っています。さらに PAPRI が設立・運営している、日本の学年で言えば中・高校を合わせた私立学校を訪れて、生徒たちと交流しました。また村の若い未婚の女の子たちのグループとも交流会を持ちました。

翌 29 日は、公立学校に通う、貧しい家庭のドロップアウトしがちな子供たちのために補習を行っている PAPRI の運営する塾に行き、子供たちと交流しました。さらに Bangladesh で「ハードコアプア」と呼ばれる、村で最も貧しい人たちを支援する活動を見学しました。

恵泉女学園大学短期フィールドスタディ（バングラデシュ）日程表
(2007年7月24日～8月2日)

日	曜	午 前	午 後	夕 方	宿舎及び車
24	火	09:00 成田空港第一ビル出発階タイ航空カウンター近く集合 11:00 成田発 (TG641 便)	15:30 バンコク着 (ミニバス) 17:30 ホテル着	18:00 繁華街近くのMK レストランで夕食、その後散策し、バーに入る	マレーシアホテル
25	水	07:30 ホテル発 (ミニバス) 10:30 バンコク発、TG321 便 (機内でタイからの参加者と合流)	11:55 ダカ着 14:00 ホテル着 15:30 ホテルにてオリエンテーション"	17:30 アーロングにて民族服など購入 19:30 ホテルで夕食	クオリティー・イン 13 (バス+空港からのみピックアップトラック)
26	木	8:00 ホテルにて朝食 9:00 ホテル発 AM 国会議事堂、殉教者記念碑、ダッカ大学等見学	13:00-14:00 ベンガル料理のクストリ・レストランで昼食 15:00-17:00 オポロジョエ・バングラデシュ運営のストリートチルドレンプログラム見学 (サエダバードバスターミナル&ドロップインセンター)	19:30 ホテルにて夕食	クオリティー・イン 13
27	金	07:00 ホテルにて朝食、各自チェックアウト 08:30 ホテル発 10:00-11:00 ノルシンディ市の現地農村開発 NGO の PAPRI 事務所 11:00-13:00 市内の女性 NGO の MDS 事務所 14:00 ベラボ郡の PAPRI 本部到着	14:00 PAPRI にて昼食 15:00 PAPRI に関するオリエンテーション 16:30 PAPRI 周辺の散策	20:00 PAPRI にて夕食	ノルシンディ県ベラボ郡の PAPRI 本部のゲストハウス (27日はバス、27-30は PAPRI 手配の緊急用乗用車一台待機)
28	土	07:30 山羊屠殺 08:00 PAPRI にて朝食 A 組 (大橋) : カンガリ村小規模融資グループ訪問 B 組 (アロム) : ラームナゴル村小規模融資グループ 11:30-13:00 NVS 中・高等学校訪問	14:00 にて昼食 A 組 (大橋) : マムダバード村 j 少女グループ訪問 B 組 (アロム) : ナラヤンプール村少女グループ訪問	20:00 PAPRI にて夕食	PAPRI ゲストハウス
29	日	07:30 PAPRI にて朝食 A 組 (アロム) : 小学生補習教室 B 組 (大橋) : 小学生補習教室 11:00-A&B 障害児プログラムで二軒の家庭訪問	13:30 PAPRI にて昼食 A 組 (アロム) : モノハラバード村の最貧層グループ訪問 B 組 (大橋) : ロヒメルカンディ村の最貧層グループ訪問	17:00-19:30 文化交流会 20:00 PAPRI にて夕食	PAPRI ゲストハウス
30	月	9:00 PAPRI 事務所スタッフとまとめの会合 10:00 PAPRI 発	12:30 コミラ軍駐屯地近くの第二次大戦兵士墓地の日本兵の墓 13:30 コミラの農村開発研究所 (BARD) にて昼食 14:30-16:00 BARD 隣接及びモイナマティ仏教遺跡見学 19:20 ダッカのホテル到着	20:00 ホテルにて夕食	クオリティー・イン (バス)
31	火	08:30 ホテルにて朝食 AM 堤防沿いのスラム及びビハール難民のジュネーブキャンプ訪問	12:00-13:00 日本の NGO シャプラニール事務所訪問 13:00-14:00 シャプラニールで昼食 14:00-16:00 現地の女性 NGO ナリボッコ訪問	17:00 アーロングで最後の買い物 19:30 韓国料理屋で在パ邦人との夕食交歓会	クオリティー・イン
1	水	08:00 ホテルにて朝食 & 各自チェックアウト 10:20 ホテル発 (ホテル手配の車) 11:10 ダッカ空港到着	13:10 ダッカ発、TG322 便 16:30 バンコク着、タイからの参加者及び現地解散学生とお別れ、その他は空港内のロビーもしくはホテルで待機	21:00 空港内レストランで夕食 23:10 バンコク発、TG642 便	機中 on board
2	木	07:30 成田空港着、解散			
3~9日		健康状態を毎日担当者に連絡			
12,19,26日		一週間ごとに健康状態を担当者に連絡			

他には、障がい児／者を対象とするコミュニティー・ベースド・リハビリテーション (CBR) の活動も見学しました。CBR とは、専門的施設でなく在宅の障がい児／者が、身近な資材や技術を使った補助具を使い、周辺の人々の理解と助けを得て、それまで閉じこもっていた子／人が周囲を歩くようになる、社会生活を送るようになる、といった活動です。さらにこの晩は、村人や PAPRI のスタッフの中の芸達者たちと、学生の中の芸達者たち、つまり踊りの上手な学生たちが相互に芸を披露しました。

村での最終日の 30 日午前中は、PAPRI のスタッフにも加わってもらって、学生が一人ずつ質問や感想を述べるまとめの会をもちました。そしてその午後は、PAPRI から車で数時間のコミラ市周辺にある墓苑と仏教遺跡を訪問しました。イギリス大使館が資金を提供して綺麗に整備されている連合軍兵士の墓苑には、第二次世界大戦中、無謀なインパール作戦でインド亜大陸で斃れた 20 人くらいの日本の若い兵士が葬られています。こんな異郷の地でどんな死を迎えたのか、想像するだけで胸が締め付けられる思いがします。このあと、三蔵法師が近くまで来たというコミラ市近くの大きな仏教遺跡 2ヶ所を見学して、ダッカに帰ってきました。

ダッカ最終日の 31 日、午前中はスラムとビハール難民のキャンプに行きました。この午後はフェミニスト系の NGO を訪問して活動に関する話を英語で伺いましたが、学生たちの理解には限界がありました。そしてその晩は、駐在員や NGO、海外青年協力隊などで働く現地在住の日本人の方々との楽しい交流会を持ちました。

お手元のもう一つの資料をご覧ください。バングラデシュ短期 FS は「第三世界の現実に触れ、何が問題か、何をすべきかを考える」というテーマを掲げていますが、私は参加する各学生に現地で特に注目する個人研究テーマを持たせています。この資料は、その研究テーマの一覧です。

学生の個人研究のテーマの例ですが、以前にタイの長期 FS に参加した学生は、タイでは曜日が日常生活でも重要だと学んできたので、バングラデシュでは誕生日と誕生曜日のどちらを重視しているか、日本人と比較しました。また「家庭の燃料」というテーマの学生もいました。この学生は新潟の出身で、おばあちゃんが若いころにどういう燃料を使ったのか事前に聞いて調べておき、今のバングラデシュの燃料と比較していました。「バングラデシュの目」というテーマもありました。日本の子どもとバングラデシュの同じ位の年の子どもに視力検査を行ってみたら、圧倒的にバングラデシュの子どもたちの視力の方が良いということがよく分かりました。こうした学生の個別のテーマについて、学生には原則として事前に日本のことを調べさせています。そうしないと、現地で実感のない頓珍漢な質問や調査をしてしまうからです。

私の短期 FS は、中身が濃過ぎて荷が勝ち過ぎるとよく言われるのですが、こういうテーマを設ける以前は、バングラデシュを訪れている最中に学生はやや漫然と過ごしていました。部分的にはそうであっても仕方ありませんが、見るもの、触れるもの、交流するものの中の 1つを自分のテーマとすることで、日常的に前向きな姿勢が見られるようになりました。私からも、「これはあなたのテーマにこう関連している」といった働きかけも増えました。ただし学生はそれぞれのテーマに沿った調べをしなくてはいけない、しかし通訳の数や時間は限られているので、私自身はととても大変です。それでも、学生にとって「これは私がバングラデシュで学んだこと」が増えたり深まったりするきっかけになっているように思います。

2007年度短期FS（バングラデシュ）の全体及び学生のテーマについて

2007年11月11日

大橋正明 短期FS（バングラデシュ）担当教員

(全体のテーマ)		
短期FS テーマ		第三世界の現実に触れ、何が問題か、何をすべきなのかを考える
事前講義テーマ		南アジア訪問のために必要な知識と礼儀作法を身につける (春学期、13回の講義)
No.	学生の個人研究テーマ	
1	人間環境学科3年	誕生日と誕生曜日について—日本とバングラデシュの比較
2	国際社会学科2年	バングラデシュにおける喫煙に関する研究
3	国際社会学科3年	バングラデシュ人と日本人の目から分かること—現地調査を通じて
4	国際社会学科3年	バングラデシュの遊びについて
5	国際社会学科2年	バングラデシュ人の名付け親と名前の由来
6	国際社会学科2年	リキシャアート（自転車力車の絵）
7	英米文化学科4年	バングラデシュと日本の食文化の比較—お米からわかること
8	国際社会文化学科4年	家庭の燃料
9	国際社会文化学科4年	バングラデシュのモスジット—祈りの場の形態と実践
10	国際社会文化学科4年	お米がご飯になるまで—バングラデシュにおける精米・加熱方法
11	人間環境学科4年	バングラデシュの飲み水 / 生活用水と農村の砒素汚染

恵泉FS 学生を受け入れることに対する
PAPRI と周辺住民の影響

Poverty Alleviation Participatory
Rural Initiatives, Bangladesh 専務理事

アブー・バゼッド

Abu Based



今日お越しの皆さん、ようこそ。私の名前はバセッドです。バングラデシュの小さなNGO、Poverty Alleviation through Participatory Rural Initiatives（参加型農村イニシアチブを通じた貧困緩和）、その頭文字を取ったPAPRIという団体の代表をしています。私たちの団体は日本の国際協力NGOであるシャプラニールのプロジェクトが独立した団体で、以前から長い間、農村の人々の福祉のために活動をしています。

私たちの活動を紹介するために、少し写真をご覧ください。これは（写真1）例年になく厳しい冬だったので、寒さを防ぐための毛布を配っているところです。この人たちは（写真2）最貧困層（ハードコアプア）と呼ばれています。そうした人々への技術研修の様子です。これは（写真3）成人識字学級の様子です。これは（写真4）子どもの権利について学ぶための集会の様子です。

多くの日本の方との交流もあり、たくさんの方が来てくださっていますので、私たちの評判は日本にも広がっているのではないかと思います。先日、ノーベル平和賞を受賞したグラミン銀行のユヌスさんが立教大学で講演をしたときに、私たちのNGOの話も出たということです。またこうした交流や経験を積み重ねて来たので、私たちはその中からいろいろなことを学んできました。つまり日本から来ていただける方々から、私たちがたくさんを学んでいるということです。



寒さをしのぐための毛布を配布。（写真1）



最貧困層への技術研修。（写真2）



成人識字学級。（写真3）



子どもの権利について学ぶ。（写真4）

(当日配布した、恵泉の学生が作成した PAPRI の紹介文)



(Poverty Alleviation through Participatory Rural Initiatives
= 参加的農村イニシアチブを通じた貧困緩和)

私たちは、ノルシンディ県での農村ホームステイ中は、農村開発のための地元 NGO である PAPRI の皆様にお世話になりました。PAPRI のゲストハウスに宿泊し、日中は PAPRI が支援している様々なプログラムを見学させていただきました。

PAPRI
とは…

日本の国際協力 NGO である「シャプラニール＝市民による海外協力の会」が、1980 年からこの地域で農村開発に取り組んでいた。そしてそのスタッフが中心となって、1999 年 7 月に村人の生活向上を目指した PAPRI という名の地元の NGO として独立した。この PAPRI にはベンガル語では「花びら」という意味もある。いくつかのプログラムは、シャプラニールやユニセフなどからの資金提供で実施されている。現在の有給スタッフ数は、およそ 150 人で、ノルシンディ県内でも有数の規模。

●主な活動内容●

1. 低所得者への支援：貧しい村人の組織化、マイクロ・クレジットによる小額融資、様々なトレーニングの機会の提供、特に貧しい村人への支援
2. 少女グループの組織化と支援：結婚、性、ダウリ（持参金）、健康、制度などについて知識を学んだり、自主的な活動を行う。
3. 児童対象の補習教育：公立の小学校に通う貧しい村人の子供たちがドロップアウトしないための補習教育
4. 障がい者支援：在宅障がい児を対象にしたリハビリテーションなど
5. 私立中・高校の経営：NVS（日本ボランティアサービス）から支援を受けた NVS 中・高校

…などがあげられる。

よい影響のことですが、まず 1 つは、村人にとって日本からお客さんが来るということは、非常に楽しくうれしいことです。日本からたくさんのお客さんが来るということが、バングラデシュの行政やほかの団体に対して PAPRI の評判として広がっていきます。そうしたことを我々は組織として活用することができます。また訪問者の方々から訪問の際にお支払いいただく料金を頼りに活動を行うということはありませんが、それでも多少の収入にはなって、それを活動に活用しています。

今度はネガティブなインパクトの方についても申し上げたいと思います。日本から来る皆さんは、たくさん経験を積みたい、いろいろなことをしたいという思いで来られます。そのようにわっと舞い上がっているときに、残念ながらカメラやボールペンやノートなど、大切なものをなくしてしまうことがあります。

また、私たちはできるだけおいしいご飯を食べてもらおうと思って一生懸命いい料理を出そうと努力するのですが、その努力がまったく通じずに、食べてもらえないということ

もたくさんあります。私たちははしやナイフやフォークを使わないで手で食べますが、こうした習慣に慣れないという方もいらっしゃいます。

さらにバングラデシュの村人が、いわゆるお金持ちの国から来たということで日本人に対して直接お金をくださいと言ってしまうこともあります。また、PAPRI は日本人たちとこれだけお付き合いがあるのだから、おそらく日本からたくさんお金をもらっているに違いない、と思われてしまうこともあります。それから、日本人と知り合いになりお付き合いを深くしていくうちに、自分や若い世代が日本に行けるかもしれないという期待を村人に抱かせてしまうこともあります。

私たちは日本の方々から、私たちの活動に対していろいろな助言や感想を含めて意見をいただきますが、現状にあまり即さないアドバイスであることも正直たくさんあります。それについてはそのまま活動に生かすことはできないわけです。

それから、時々病気になる方がいらっしゃいます。私たちは私たちのできる範囲で病院に連れて行き医者に見せるわけですが、そのときに日本の方はバングラデシュの医者を信用しません。

また、バングラデシュにももちろん犬がいますが、中には狂犬病にかかった犬もいます。そういう危険性をあまり意識せずに、動物を見てかわいがってしまう人たちもたくさんいます。同様に、バングラデシュの子どもたちとたくさん触れ合いの機会がありますが、その子どもたちが非常に衛生的に悪い状態に置かれている子どもたちであっても、日本人の方はお構いなしに触って交流をしてしまいます。

多くの日本人の方がホームステイを望まれます。村人の生活の状況や寝る場所の安全性の問題などを考えると、結局勧められないという結論を私の方で下すと、なぜホームステイができないのかという不満が私のところに来てしまいます。

バングラデシュの村人は、生まれてから一度も自分を撮った写真を持っていない人がほとんどです。日本から来た方はみんな写真をたくさん撮っていきます。村人はこの写真をきっともらえるに違いない、と期待するわけです。ところがいつまで待ってもその写真がもらえないということで、不満がうっ積してそれが私にぶつけられたりします。

それから、あまりに村人との交流に気を取られてしまって話が長くなり、私たちが組んだプログラムのスケジュールが守れなくなってしまう場合も大いにあります。

一連のネガティブなことに加えて、悲しい事件について皆さんにご紹介します。もちろんその事件の詳細全てを申し上げることはできませんが、できるだけ簡潔に述べたいと思います。



バングラデシュ短期 FS：ナラヤンプルの村で、リキシャに乗って移動した。

その事件は去年（2006年）のことでした。名前は申し上げませんが日本の1つのスタディツアーの一行がバングラデシュに来てある場所を訪問しました。ところがその場所での受け入れが準備されていなかったために、私たちは休日だったのですが突然電話がかかってきて、今からそっちに行っていだろうか、受け入れてほしいという要請を受けました。ご縁がある日本人からの要請でしたので私たちは受け入れをすることに決め、そのチームが翌日、私たちのところに到着しました。昼食後の時間帯でしたが、そのとき停電してしまいました。

私たちの事務所には小型の発電機がありました。停電なのでその発電機を動かしたところ、その発電機が爆発してしまいました。その結果厨房がすべて焼き払われてしまいました。その瞬間私も近くにいる、燃え盛る音も耳にしました。そのとき、その燃え盛る厨房の中から火だるまになったPAPRIのスタッフが2名、転げ出てくる場所を目撃しました。厨房が燃えているのと同時に、その2人が火だるまになっていたわけです。私たちは火だるまになっている2人をとにかく助けられないといけないということで、すぐに手配をして病院に連れて行って、燃えていた厨房の後始末については周囲の村人に頼んでいきました。

村の病院で1日半ほど治療に努めましたが、この病院はやけどに対して治療はできないということで、ほかの病院に行きました。しかし、それでも適切な治療が受けられないということで、もっといい専門の病棟のある首都のダッカの病院に移送しました。ダッカに輸送した2日後、そのスタッフの1人が死亡してしまい、イスラム教の規定に則った葬式を営んでいるときに、もう1人のスタッフの死亡のニュースも飛び込んできました。

もう一度強調しておきます。私たちはこうしたツアーの受け入れは、決して団体の資金作りのために行っているわけではありません。やはり日本とのきずな、関係というものを大事に思って受け入れているわけです。

この事件に対して、PAPRIが負った組織的責任がどういったものだったのか、ということを紹介したいと思います。治療の手配と治療費の負担は、PAPRIで責任を持って対応しました。他に直接的な費用だけではなく、バングラデシュの習慣の中でいろいろな方面にたくさんのお金を支払う必要があります。なぜ必要なかというお話は話すときと長いので今日は省きますが、そういった経費も負担しました。

一番悲しかったことは、亡くなった2人のスタッフはそれぞれの家庭の唯一の稼ぎ手であったということです。残された家族に対して、PAPRIとしても支援の手を惜しみませんでしたし、シャプラニールからも大きな支援をいただきました。この翌年（2007年）に立教大学の岡田先生とその学生さんたちが来られたのですが、状況を見て、残された家族と焼けた厨房の再建のために、またご支援をいただきました。

なぜこうした事故が起きたかを反省するに当たっていろいろ考えました。まず大きかったのは、来るという連絡を受けてから受け入れ側として十分な準備をすることができずに受け入れてしまったこと、これが非常に大きな要因だったと考えています。先ほどのタイの方々の発表にもあったと思いますが、フィールドスタディを受け入れる側は、そこで何か起きたときの責任を第一に負わなければいけない立場にあると思います。受け入れる責任が嫌だと言っているわけではなくて、そういう責任を我々が負っているということです。

ですからその責任において、残された家族のその後にも私たちは常に気をつけて、状況把握するように努めています。いつまでそうした状況把握に努めなければいけないのかわかりませんが、常にそのように努めていくことが我々の責任だと考えています。

最後になりますが、私たちPAPRIとしては、今後も皆さんとよい関係を築いていくために努力を惜しまないでいきたいと思っています。現地に来られる学生さんたちからよく聞くのは、親御さんがかなり心配をして送り出しているということです。お前は本当にバングラデシュみたいなどころに行って大丈夫なのか、ということと言われてきたという話を聞くにつけ、私たちはどれだけいい環境を提供する必要があるのか、という責任を感じます。

今日このシンポジウムに参加することができてよかったのは、どういう環境をフィールドスタディに対して提供する必要があるのか、すべきなのかということ、私自身も再考することができたことです。こうした経験を元に、今後もよりよい関係を皆さんと築いていきたいと思っています。今日は本当にありがとうございました。



PAPRI 事務所の建物に入る。



大橋先生（左端）とバゼッドさん（右端）。

Impact on PAPRI and Residents of Hosting Keisen University Students for the Field Study Program (Summary)

Poverty Alleviation through Participatory Rural Initiatives, Bangladesh

Abu Based



First, looking at the positive effects for PAPRI in Bangladesh of receiving students from Japan, it is frankly an interesting and happy thing for us. It can also be pointed out that PAPRI can earn a reputation by receiving many guests from Japan leading to various profits for the organization. It's not that visitors bring in direct financial profits but rather that the higher reputation created by foreign visitors are useful for our activities.

Looking at some negative points and impressions, our food and customs do not always agree with Japanese students and there are also gaps between our staff and visitors regarding hospitality. When students suffer from health problems, they have difficulty trusting local doctors; and due to a lack of understanding of sanitary conditions, they come into careless contact with dirty animals and children, worrying and disappointing the staff and villagers. In addition, because Japan is a rich country, residents of the villages we visit end up demanding money from Japanese or wrongly suspecting that PAPRI is getting money from them, and villagers sometimes get angry because students do not send copies of the photographs they took, etc. As a result, a situation arises where the pent-up frustration of both the Japanese sending side and the receiving side are suddenly directed at PAPRI.

I would like to mention one major sad incident in particular. In 2006, while a study tour group from a Japanese university was staying at our lodging facility, there was a generator explosion in our kitchen in the facility, and two of our staff members were tragically killed. PAPRI compensated them for the costs of medical treatment, funerals, etc., and gave financial support to their families in consideration of the fact that the two were the only breadwinners in their families.

This tragic incident not only imposed a large financial burden and a big emotional scar on us, but also taught us a powerful lesson. Reflecting on the reason why this accident happened, we came to think that the major factor was that we received the students without making sufficient preparations. As a result of this accident, we came to realize anew that we are in a position to bear the primary responsibility as the receiving side when something happens.

We hope to build a better relationship with people in Japan. We keenly realize that we have the responsibility to offer a better environment for the field study program.

ドイツ短期 FS の概要

恵泉女学園大学人間社会学部国際社会学科教授

ドイツ短期 FS 担当

川戸 れい子

KAWADO Reiko



ドイツの FS は、本学が短期 FS プログラムを開始した初年度（1999 年）から 2006 年度まで継続して実施してきたプログラムです。

ドイツ短期 FS の最近のテーマは「隣人は誰か」です。今ヨーロッパには、非常に多くの外国人と称される人々が来ています。その内訳としては、いわゆる就労が目的である人々、また難民という形で来た人々、その他、非常に多くの外国人が来ます。なにしろ陸続きですので、例えばポーランドあたりから来ようと思えばいくらでもドイツまで来ることができるのです。

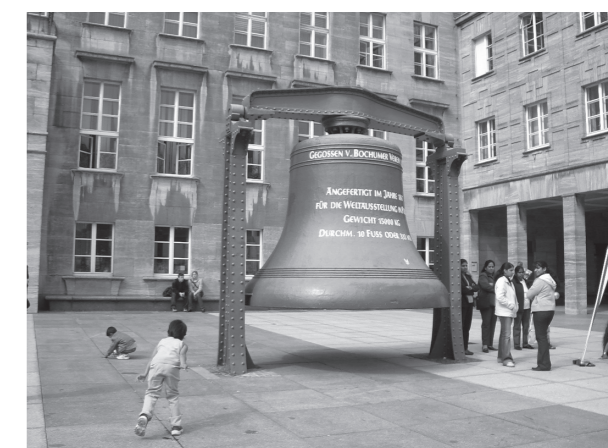
さらには、これは難民の受け入れ条約などの関係もありますが、遠くはスリランカあたりからも、タミール系の人々が結構まとまった数でドイツに来ています。一方、日本は入管法の関係で外国人の受け入れは非常に少ないけれども、私たちの周りにも多くの海外からの人々が住んでいます。

これから日本はやはり第二、第三の開国をしていく状況に入っていきます。この点に関して、ドイツはいい意味でも悪い意味でも先進的な状況にあります。ドイツでは多くの海外の方を受け入れざるを得ない状況にあるので、その実態を学びたいということからこのフィールドスタディを開始しました。

受け入れ先の白石さんが後からお話ししていただきますが、テーマは外国人問題だけではなく、さまざまな形に広がってきます。ドイツの歴史等も学ばなければならないし、ドイツは地域差が非常に大きいところですので、現在の地域の状況等も学生たちが学ばなければならないということで、テーマは少しずつ広がりを持ってきました。

お手元の資料には 2005 年度のフィールドスタディの日程表があります。毎年大きな違いはありませんが、訪問先が多少変わることはあります。原則として必ず訪れるのが市役所の外国人局です。ここは法改正等に伴ってさまざまな対応の最前線にあるところで、どうやって外国から来た人々がドイツで暮らしていくことができるのか、ドイツではインテグレーションという言い方をしていますが、その過程などについて話をうかがっています。

現地で日本語を勉強している学生たち、これはドイツ人とは限りません。日本語学習者も非常にさまざまな方が



訪問するドイツのポーfum市役所前の鐘。

います。このフィールドスタディでお世話になっている日本語学校はヨーロッパでも屈指の日本語学校です。外交官や先端企業の方々などが日本に来る前には必ずそこで勉強しなければならない、それだけの権威のある日本語学校です。そこの学生たちと本学の学生たちが交流を持ちます。日本語を学んでいる方からすれば、本学の学生たちは生の日本人なわけです。日本語学校の先生方は、いわゆるティーチャートークをします。相手に分かるように話すわけです。ところが、本学の学生たちはドイツ語も決して達者ではなく、分かるようにわざわざ話すという日本語の話し手でもなく、普通の日本人です。ですから、そういう意味では、お世話になるだけでなく、日本語学習において少しだけお役に立っているかなと考えています。

最後に、ほかの短期フィールドスタディと大きく違う点は、ドイツフィールドスタディは宿を変えません。一切動かずに、寝るところはいつも同じです。なぜそうしているかという、治安の面、安全管理の面と、もう1つはヨーロッパの場合はアジアと違って諸物価が非常に高いからです。

特に、なぜ今年（2007年度）初めてドイツ短期FSの実施を休んでいるかという理由のひとつは、ユーロが高過ぎるからです。経費を節減するためには、ホテル等を使わずに語学学校が持っているドミトリーに定住します。ご飯もなるべくそこの学食でいただくようにして経費節減に努めています。欧米のいくつかのフィールドスタディがありますが、どのプログラムも悩ましいのは経費の点です。特に昨今のユーロ高、ポンド高の中では、実はかなり予算的に厳しいです。フィールドスタディ実施期間中、私は毎日、通訳しながら学生たちの案内をするほかに、毎晩懸命にお金の計算をしているのです。



現地の日本語を学ぶ学生とディスカッション。

【2005年度 ドイツFS 日程表】

日時	場所	時間	交通手段	概要
2月6日	成田	10:30-14:15 16:40-17:25	LH711 LH810	成田空港発 — フランクフルト着 フランクフルト発 — デュッセルドルフ着
2月7日	ボーフム	9:00-10:30 13:00	バス	日本語学科の受講生との歓迎会 平和村訪問、ショッピングセンター"CENTRO"訪問
2月8日		9:00-10:30 10:45-12:15 13:15-15:30	地下鉄	ドイツ語授業 市役所外国人局訪問
2月9日		9:00-10:30 10:45-12:15 14:00-15:30		ドイツ語授業 ドイツの学校についての講義
2月10日		8:45 14:00-16:00 16:00-18:00		小学校訪問 ルール地方の歴史の授業 受講生との食事作り
2月11日			地下鉄	遠足
2月12日				
2月13日		10:00-12:00 14:30-16:00		総合学校訪問 ドイツの祭日についての講義
2月14日		10:30 14:30-16:00 16:15-17:45	地下鉄	炭鉱博物館訪問 ドイツ語授業
2月15日		9:00-10:30 10:45-12:15 14:00	地下鉄	受講生との市内ラリーの準備 ボーフムラリー
2月16日		11:00 14:30-16:00 16:15-17:45	地下鉄	鉄鉱所訪問 ドイツ語授業
2月17日		10:00		終了式
2月18日				
2月19日	成田	13:15-14:25 15:30-11:10	LH841 LH714	デュッセルドルフ発 — ミュンヘン着 ミュンヘン発 — 成田着

ドイツ・ルール工業地帯での フィールドスタディ

ボーフム・ルール大学外国語教育研究所日本語学科学科長代理
ドイツ短期 FS 受け入れ担当者

白石 文子

SHIRAISHI Fumiko



先ほどからいろいろお話を伺い非常に勉強になっていますが、これから今までのケーススタディとまったく違うドイツフィールドスタディの説明に入ります。

1. LSI (ボーフム・ルール大学外国語教育研究所日本語学科)

恵泉女学園大学のドイツ FS を受け入れる私たちの機関は LSI といい、ロシア語、中国語、日本語、アラビア語の4つの外国語を集中的に教え、教授法を開発していく実践と研究を行っている研究所です。ロシア語科が1973年、中国語科が1980年、1983年に日本語科、アラビア語科が1985年に設立されています。

LSIは2006年度まで州の独立した研究所でしたが、行政改革の影響を受けてボーフム・ルール大学の管轄に入りました。そこで現在の正式名称は、ボーフム・ルール大学外国語教育研究所日本語学科という非常に長い名前になっています。

本研究所は成人教育を行っていて、生徒はビジネスマンがほとんどです。ビジネスマンのほかに、日本で研修を受ける学生、交換留学生などを招いて講義します。3週間コースの集中講義で、8時30分から5時ぐらいまで毎日の講義を3週間実施します。クラスは8人ぐらいで、その中で、客室があつて宿泊施設があるという機関は当研究所がドイツ唯一の研究機関です。こちらの恵泉女学園大学でフィールドスタディとは別に、日本語教育実習も2003年から2005年までの3年間実施しました。このような機関で外国語を教えています。ただ、私たちは外国語だけではなく、異文化コミュニケーションに関する講義を実施しています。

2. ドイツ・ルール工業地帯の特色

恵泉の川戸先生から私たちの機関でフィールドスタディを受け入れてくれないかと打診されたときに、いったい何を学習するのだろうかと考えました。川戸先生は外国人問題を取り扱いたいとおっしゃいました。当方でも異文化研究の側面からも面白いことができるかもしれないと思い、川戸先生と一緒にいろいろ考えてプログラムを練ってきました。

ここにいらっしゃる皆さんは、小学校や中学校でルール地方ということをおそらく聞いたことがあると思います。ルール地方はドイツのノルドライン・ヴェストファーレン州にあります。ルール地方があるノルドライン・ヴェストファーレン州は、オランダとベルギーに国境を接しています。隣が外国というところです。

ルール地方のことをなぜ皆さんが小学校などで勉強なさったかというところ、この地方はドイツの代表的な工業都市が集まっているところだからです。

ルール地方は、19世紀後半の産業革命の折から炭鉱の町として繁栄しました。そのため第2次大戦中は非常に激しい爆撃を受けて破壊されました。その後東西に分轄されてしまっ

たので、ベルリン、ドレスデンといった工業都市を失ったドイツの復興を支えた工業都市です。そこで戦後、ドイツの経済を支え、石炭、鉄鋼業、化学工業などが盛んに行われたという背景があります。

しかし、60年代に入ると炭鉱が閉鎖されていき、1970年代は日本と同じように産業構造が転機を迎えます。従来までこの地を支えていた重化学工場が衰退して、その衰退とともに残ったものが汚染、それから失われる景観ということで、この地方はドイツで唯一汚いといわれる地域であるとドイツ人からもレッテルを張られている地域でした。そして失業率も高くなっています。東ドイツと統一した後も旧西ドイツ内で一番汚いところでした。

ところが、近ごろは産業遺産を生かした町づくりをしようではないかとルール地方を系統立てて見学することが可能になってきています。例えばユネスコの世界遺産に指定されたほか、ヨーロッパ文化都市にも指定されました。

以上を背景として、このルール地方と外国人問題は、炭鉱の町ボーフムにどのように関係があるか説明します。炭鉱ですから、19世紀の産業が繁栄した折にすでにポーランドから外国人を集めています。労働者としてポーランド人がたくさん入植し、第三帝国時代にはすでに外国人問題が起こっています。

第2次大戦後は、労働者の男性が減ってはいますが、やはりここで産業を復興するために、ポーランドからではなく、南の方から労働者を集めました。1960年代にはギリシャ、イタリア、そしてその後にはもっと遠い国トルコからも募集しています。それでルール地方には外国人がどんどん増えていきますが、これ以上外国人を増やさない方がよいということで、政府は1973年に「新規の外国人労働者募集取りやめ」という法令を出します。この法令によって外国人は増えないのかというとそうではなく、彼らは国からドイツに家族を呼び寄せ、親も呼び寄せ、子どもも呼び寄せ、子どもが成人すると母国で結婚相手を見つけきてドイツに住むのです。そのような状況でまた外国人はどんどん増えます。

ドイツ人の人口は1970年ぐらいから減っていきませんが、一方で東欧圏やロシアから、ドイツから移民した二世は戻ってきてよいという法令が出るので外国人はどんどん増えていきます。その人たちが親戚一同を呼びドイツに戻ってきて、1980年代になるとソ連の崩壊があつて外国人の数が爆発的に増えます。さらに、第2次大戦のときの過去の過ちを繰り返さないということでドイツは難民をかなり受け入れるということもあります。

以上のように外国人はどんどん増えていきますが、1970年代ぐらいからこの外国人問題はルール地方の問題だけではなくドイツ全体の問題に変化し、その頃にはルール地方に新しい問題が起こります。それが失業という大きな問題です。



3. ルール地方で実施するドイツ短期フィールドスタディ

このようなドイツ国内の背景をふまえて、フィールドスタディのいろいろなプログラムを組んできました。外国人問題は、政治的、経済的、そして社会的問題を含んでいますが、まず私たちは社会的問題を中心にすることを考えました。先ほど上村先生から、差別する側と差別される側のお話がありましたが、ドイツの外国人問題は外国人を敵視する、あるいは帰化させる、それから統合と同化がよいのかというさまざまな視点があります。統合はインテグレーションですけれども、この統合で終わるのか、それともドイツ人の方に同化を求めるのか。同化しているのか、していないのか、あるいは同化するべきなのか、すべきではないのか、そのような視点を学生たちには考えてほしいと思いました。

同化するとはどういうことかという、大きい鍋、つまりドイツの鍋に外国人をぼんぼん入れてスープのように混ぜて、スープにしてしまうということなのです。スープにするのか、それともサラダにして混ぜるのか、あるいはオードブルのように並んでいるのか、どのような国をつくるのか。こうした問題が今どうなっているかをふまえてプログラムを組みました。

4. ドイツ FS の内容と課題

本日発表があった2つの国、タイとバングラデシュにおける短期 FS プログラムのねらいはその国の文化を見ることだったと思います。ドイツでは、外国人が入ってきてどのように統合するかの問題を見るというのがねらいです。まず基本的知識を得るために、プログラム1日目か2日目に市庁舎の外国人局で話を必ず聞きます。それから炭鉱博物館を見学し、そこで炭鉱の歴史的な話を聞きます。それからボーフム、ルール地方の歴史博物館を見学して話を聞きます。

外国人問題の現場はどうなっているかを見るために、なるべく外国人の多い小学校、中学校、高校総合学校などを見学します。また職場での環境を視察するために工場見学も実施します。以前はノキア工場を見学しましたが、その後少し無理があったので鉄工場の方を見学しています。

また本研究所は日本語を教えている教育機関ですのでドイツ人の学生がいます。ドイツ語を習った恵泉の学生と LSI のドイツ人が日本語やドイツ語の片言で意見交換するプログラムも立てました。短期 FS の回を重ねるごとにプログラムはさまざまに変化してきました。

その経過で、いろいろな問題も浮上してきました。たとえば、2週間のプログラムで学生がとても疲れてしまうということです。自分で自分の健康状態を把握できない学生もいて、夜、早く寝ることを考えない。

また、外国人問題でデリケートな感情問題が起こってくるので、見学されたくないと言われたこともありました。難民キャンプではない収容所を訪問したことがあります。そのときに見学する側もされる側も非常に嫌な思いをして、これは1回でやめてしまいました。

逆に先方から見学してほしいと言われることがあります。トルコ人のある支援団体の組織からは、一度伺ったら、明日もこういうプログラムがあるから来てほしい、夜もこういうプログラムがあるから来てほしいと、学生たちの訪問を要請されました。しかし通訳やプログラムの諸事情により、2年間ぐらい継続して訪問しましたが3年目に中止しました。

その後、今度は恵泉の学生の方から、日本のテレビ番組で有名になり地理的にも近い国際平和村を訪問したいと希望が出て、訪問が実現しました。また、ドイツのカーニバルの

時期である冬にフィールドスタディが行われることが多かったので、ドイツでどうしてカーニバルが起こっているか、というテーマのプログラムも始まりました。

2006年に行われたドイツ短期 FS プログラムは3つのテーマがあります。

これまで述べたようにドイツ短期 FS ではさまざまなプログラムを考えて、テーマ1「ルール地方の社会問題」に、外国人問題だけではなく、「ルール地方の暮らし（産業と生活）」というテーマで、新たに昔ながらの民家園の見学なども加えました。ドイツ短期 FS は語学研修ではないのでドイツ語の授業は不要とのことでしたので、代わりにドイツ語を使ってボーフム市内をラリーで回るオリエンテーリングのようなプログラムを作りました。

テーマの2は「教育」として、大学見学など以前のプログラムをほとんど変えていません。テーマ3の「社会問題」は、市役所見学や国際平和村見学など、以前のプログラムを残しています。

さらに、今後実現させたいプログラムもいくつかあります。たとえばボーフムにはドイツの自動車産業の4番目ぐらいに入るオベル社の最大の工場があります。そこに行ってほしいと思っています。また、今までは時間の関係でできませんでしたが、社会福祉活動として、ドイツ・カリタスも訪問してほしいと思います。

5. 受け入れ側からの FS プログラムに対する視点

次に受け入れ側が体験学習プログラムをどのように考えているかを述べます。FS プログラムを企画するときいつも考えるのが、どこに境界線を置いて、体験学習を実施したらいいのだろうかということです。先ほど申し上げたように、立場の違いがあり、ロシア人たちが帰ってきた当時のロシアの寮を訪問したときに非常に嫌な思いをしました。先ほど大橋先生の話にもありましたが、それでは訪問プログラムをやめてしまってもいいのか、それとも行った方がいいのか。コーディネートする側の立場として、どこまでしたらいいかということを考えます。

また、国際平和村などでは、いつも日本人のスタッフの方が受け入れをしてくださり、非常に丁寧に歓迎して下さいます。もちろん皆さんいつも寄付を持っていかれますし、とても歓迎して下さるのですが、現地の子供たちとのコンタクトはして下さらないように、と言われています。もちろん子どもがハローと声を掛けてきて、ハローとあいさつをするのはいいのですが、触るとかはしないようにとストップされています。できるだけ時間もずらして、子どもが外に出ていないような時間に行くのですが、子どもたちがそれでも学生が来ると「ハロー」と声をかけます。学生はそこで英語でもいいし、ドイツ語もいいのですが会話ができなくてとても残念だなと思います。ドイツ語でなくてもいいから、せめて英語で少し会話ができるようにしてきていただければ、と考えます。

また、小学校や総合学校では、非常に楽しく授業を見学した後に、先生方の通訳を媒介として子どもたちと話などをして戻ってきます。訪問される側も外国人が見学に来てくれた、日本人が来てくれたということで非常に歓迎して下さいますし、それは両方が喜んでくれるプログラムです。ただ、教室内に10人入ることができないので学生らを2~3人ずつ分けるため、通訳を手配するのが大変で、いつもアシスタントの方なども苦労しているようです。

これから先、社会福祉活動の機関にも行きたいと思うのですが、それでは、ホームレスのところに行っていいのだろうか、それともスタッフからだけお話を聞いた方がいいのだ

ろうかというようなことも考えます。先ほどの問題と同様に、いつも境界線を考えさせられることです。

6. 送り出し側（大学）の課題—事前学習と参加目的意識の向上

最後に、恵泉の短期FSは1999年度から8年間実施しましたが、ユーロが高くなって2007年度は実施できなくなったと伺いました。これだけの高いお金を払って学生はドイツまで来るのに、これでいいのかと時々スタッフ一同考えます。というのは、恵泉側はフィールドスタディ終了後に学生が非常に成長するとおっしゃるのですが、受け入れ側としては「成長してから来てほしい」と思うのです。

学生たちは、先生の言うことを聞き非常にいい人たちで、スタッフにとってはやりやすいのです。でも、スタッフたちは子供が来たと思っているのです。何をしに来たんだろう、今日、私は疲れているから寝なければいけないという健康状態も自分で把握できないで来ている人もいます。こうした学生たちに対して受け入れ側はやはり疑問を感じざるを得ないのです。ドイツ人が学生たちに日本語で意見を聞いても、ドイツ語で意見を聞いても、英語で意見を聞いても反応が出てこないこともあるのです。

事前学習では、しっかりと教室で知識をインプットさせていると思いますが、せっかくお金を払うのですから、海外のプログラムに参加する前に国内での体験学習を実践してから参加することはできないのでしょうか。

せっかく外国にまで行くのですから問題意識を持って日本国内に目を向けるということをもう少し意識化させた後で、それでは、外国はどうなんだろう、これで知識を得るのはどうなんだろうと考えた上で、現地学習やフィールドスタディをしていただいたら、高いユーロを払ってドイツまで来て行く意味があるのではないかと思います。しかし一方で、これが大学教育の限界なのかなというような気もいたします。



ドイツ短期FS：ドイツのカーニバルの背景を考えるプログラムも実施した。

Field Studies in the Ruhr Industrial Region of Germany (Summary)

Japanese Language Department, the Ruhr-Universität Bochum, Institute of Intensive Language Training, Japonicum, **SHIRAISHI Fumiko**



LSI (Landesspracheninstitut), the host of the German Field Study program of Keisen University, is an institute for the instruction not only of foreign languages but also cross-cultural communication. Today, it is known as the Ruhr-Universität Bochum, Institute of Intensive Language Training, Japonicum. The university is located in the Ruhr-region in the state of North Rhine-Westphalia, Germany.

When Keisen University approached me with the idea of hosting a field study, I worked with the university staff to plan a program to examine issues of foreigners in the Ruhr Area. In the 19th century, the Ruhr region's prosperity was based on heavy industries such as coal and steel, using a large number of foreign workers, but it has faced a changing industrial structure since 1970, leading to problems of environmental pollution and unemployment. Today, community building that makes full use of the industrial heritage is taking place, and the Ruhr region has been designated a UNESCO World Heritage site and was chosen the European City of Culture.

Keisen University's German Field Study program, conducted in the Ruhr region, has the aim of having students learn, through experience, the social issues involved when foreigners come to Germany. The program includes visits to the foreigners' bureau of the city, Mining Museum, and History Museum as well as visits to local elementary schools and factories and discussions with students studying Japanese at the Institute, for a duration of two weeks.

I would like to convey some impressions gathered from the Study Through Experience program. First, how deep can we expect the learning of the participating students to be, and in cases where the visit is seen as a nuisance by the receiving side, should we implement it at all, taking the trouble to persuade the receiving side of its value, or should we drop it? I wonder about these questions.

Second, I have some doubts regarding the attitude of the participants. Having observed students who cannot take care of their own well-being or do not know how to offer greetings or make comments during the visits, I sometimes think that they should grow up in Japan first rather than visit Germany with the hope of growing through the Field Study program. As for the issue of students' attitudes, if they would come with a concrete sense of the issues gained through their pre-visit study, the program would be more productive.

Third, there are merits for the receiving side. For students studying at the

institute, the conversations and exchanges with ordinary Japanese are stimulating. The opportunity for our students to discuss a given theme with students from Japan is the greatest single merit. Also, having the Japanese students visit elementary schools and comprehensive schools allows the children there to start learning about Japan in their classes, with the result being that German children gain a better understanding of Japan.



ドイツ短期FS：ドイツの町並み



ドイツ短期FS：ドイツの学生たちと歓談。

第3部

コメント・議論・まとめ

コメント

早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンター (WAVOC) 客員講師

和栗 百恵

WAGURI Momoe



● 海外体験学習と私の関わり

皆さん、こんにちは。今日、私がなぜコメンテーターとしてここでお話しさせていただけるのか。3つの理由があるので、自己紹介を兼ねてその理由を最初に話します。

まず1点目は、私は高校2年生の12月にタイとバングラデシュで過ごした海外体験学習の機会を持ったからこそ今の人生があると言えるほど、その体験によって得るものがあった人間です。その経験は、大学で海外体験学習を進める原体験になっています。学生にとって海外体験学習の影響は、短期的にはなかなか見えないかもしれないけれど、長期的には見えてくるものもあると思います。

2点目は、私がスリランカのNGOで仕事をしていた際、首都に近い本部で外国から来るインターン生、スタディツアー、研究者を受け入れていた経験があります。それが仕事のメインの部分でしたが、その時非常に腹立たしい思いや苦労を経験したり、「こんな状態で来るな!」という思いを持つことがありました。受け入れ側の問題意識を持ちながらNGOで働いた後に大学で働くことになったという経緯があります。

3点目は、これまで中央大学で2007年3月までの4年半と2007年4月から早稲田大学で、海外、国内両方の体験学習のプログラムに携わっているからです。

この3つの理由から、今日はコメンテーターとしてお話をさせていただけるのだと思っています。

本日は恵泉女学園大学がこの国際シンポジウムを開催したことに対して非常に感心しています。今、特に大学の中で体験的な学習の手法に人気が出てきて、いろいろな大学がそれぞれインターンシップとかフィールドスタディズなどさまざまな呼称で海外プログラムを実施していますが、多くは送り出しただけで終わってしまいがちです。そのような状況下、海外体験学習プログラムの受け入れ側の方々を招聘し、受け入れ側から見たプログラムのあり方とか、受け入れ側のコミュニティーでは何が起きているのかということ、ネガティブインパクトも含めた上で議論する場を恵泉女学園大学は企画されたのです。もちろん受け入れ側として話せない部分もまだまだたくさんあったにせよ、私は今日のみなさんのお話は、かなりオープンに本音をシェアしてくださったと感じています。

● 「有償、無償の非対称性」、「機会の非対称性」、「社会文化的影響」

最初に、大橋先生が挙げた3つの問題意識の部分にそれぞれのゲストの方々がどう答えられていたか、かつ次に現場からどのようなリクエストが出たかをまとめます。その後で各シンポジストの方々にコメントをいただきます。

大橋先生が冒頭で、「有償、無償の非対称性」、「機会の非対称性」、「社会的文化的影響」

という3つの問題意識を挙げられていました。これらの指摘については、特に大橋先生が活動されていた場所がアジアであるということと、ご担当されているプログラムもバングラデシュとタイであるためアジアに限定される点もあるかと思います。特にドイツの事例に関しては、有償、無償と機会に関する点はどのように当てはまるのか、発表からは見えなかったかもしれません。

1点目の「有償、無償の非対称性」という点について、恵泉ではNGO基金を立ち上げていて、それがスマリーさんの村の中でスカーフや織物の事業に結びついたり、国内外の視察に行く機会が提供されているということがわかりました。NGO基金に大学として携わっていらっしゃるの是非常にユニークだと思いました。

2点目の「機会の非対称性」は、例えば、チェンマイ大学、村の先生、その先にいる村の人々、そして村の中にいる、より力の弱い人々の中で日本に来られる方は誰なのかという問題など重層構造があります。もちろんそれぞれの「機会」は広がっているのですが、どこまで広げたら非対称性が解消されるのかという点は、突き詰めていくとなかなか答えが出ない部分かと思えます。

また、写真を送ってくれないというお話がありました。それ（写真撮影機会の非対象性）は本当に大事なポイントです。特に最近ではデジタルカメラの使用が多く、学生たちはそれを現像して送るというところまでなかなか気が回らないことも多いです。この点も「有償、無償の非対称性」ではなく、「機会の非対称性」につながるのかなと感じます。シンプルだけど鋭いご指摘でした。

第3点目の「社会的文化的影響」のところでは、タイの村に入ってきた日本人たち、とくに10代の若者たちから受ける消費文化の影響のお話がありました。同時にドイツのお話で非常に印象深かったのが心理的影響、つまり、ネガティブな面に触れたい日本人の学生と、触れられたくない現地の方々のお話もありました。こうしたことは、社会文化的なだけではなく、心理的な影響もひとつの問題意識として存在すると思います。国内の体験学習においてもドメスティックバイオレンス（近親者からの暴力）の被害者と話をするとき、どうしても心理的なものに触らなければいけないので、共通しているかもしれません。また「日本の中の難民」の問題も、心理的な側面に触れざるを得ず、似ていると考えました。

● 受け入れ側から日本の大学への視点

次に、受け入れ側の現場から、送り出し側の大学に向けてどのようなコメントが出たのでしょうか。

タイのチェンマイ大学のドウシット先生からは、事前準備の重要性の指摘がありました。バングラデシュのバセッドさんからは、これからも関係をつくっていききたい、つながってほしいとの期待と要望がありました。ドイツの白石先生からは、立場の違いをちゃんと意識化して成長してから来てほしい、事前準備をしっかりしてほしい、との指摘がありました。タイのスマリーさんは、一番控えめでしたがもっとも大事なポイントとして指摘されたのは、受け入れ側村人と参加学生、そして大学が共に話し合える機会を持つてはどうか、という提案でした。

これらの指摘や提案を無責任にただ聞いただけでは解決になりません。それでは大学はこうした指摘や要望にどう応えていけるのでしょうか。

事前学習の重要性、必然性については、準備をしっかりするという事に尽きます。

一方、良好な関係をつくりたい、関係を継続していききたいという点は、大学側の体制づくりが必要だと思います。受け入れていただく現場に学生を送り出すことについて何年コミットメント（関与）するのか、教員やスタッフの配置をどうするのかといった項目を、大学側はきちんと詰めていく必要があると思います。

学生を受け入れる側の現場にとっては、突然やってきて滞在して、そして帰ってからは何のコンタクトもなし、という「突然感」のプログラムの受け入れは削減すべきだろうし、双方でもっと話し合いの場を持って、事前からの計画から関わる必要があるか、と考えました。

● 受け入れ側の「変化」への期待

海外体験学習プログラムを実施しているいくつかの大学が「大学教育における海外体験学習研究会」を立ち上げ、情報や経験の交流や研究をしています。当研究会の全国大会が2007年9月に沖縄で開催されました。沖縄は国内にあって平和のシンボルとして平和学習についての受け入れ側としての役割を果たしてきました。沖縄での研究会では、沖縄の方から「たくさんのスタディツアーや体験学習を受け入れてきたが、沖縄の現状は何も変わらないじゃないか」というコメントが出てきました。

「何も変わらないじゃないか」。この言葉に触発されて私は今日、海外体験学習の受け入れ側のみなさんは、何が変えること、何を变えることを期待してこうした学生の受け入れプログラムに関わっていらっしゃるのかをお聞きしたいと思います。

ドイツは「隣人を知ろう」というテーマでもありますし、何かが変わる期待とは、少し違うかもしれません。でも、例えば何も変わらないじゃないかという意見もある一方で、制度的に毎年学生を受け入れて負担だけ増えるけれども、そこで自分たちはどうしたいのだろう、何かを変えたいのか、自分たちはここから何かを得たいのか、得たいとしたら、何を、という点を、お聞きできればと思っています。

議 論

和栗 百恵

ドウシット・ドウアンサー

スマリー・ワナラット

アブー・バセッド

白石 文子

(モデレーター) 上村 英明



(上村) 和栗先生、ありがとうございました。和栗先生が確認されたポイントと、海外体験学習と関係を持つことで「何を变える」と期待されているのか、が共通の質問です。追加のコメントをシンポジストの方にお願ひします。

● 他者への思いやりの促進

(ドウシット) 他の参加者の方のお話を伺ってとても参考になりました。「何をしなければいけないか」を考えるとまず大事なのは、体験学習に入る前の事前学習です。その事前学習の中で大事なことは、自分のことだけではなく、ほかの人がどのように感じるのかという他者への思いをもっと育てることだと思います。

つい1カ月くらい前(2007年9月)の出来事をお話します。その頃は恵泉の長期フィールドスタディの学生がチェンマイで個々の体験学習の準備をする時期でした。現在(2007年11月)はちょうど体験学習に入ったばかりなのですが、そのときに学生たちにロールプレイをさせてみました。学生たちに「あなたはこの村にずっといた村人だと思ってください。そして、外国から学生が来ます。その人たちが2カ月間あなたたちの村にすることにします。あなたたちはどのようにその人たちに対応しますか」という質問を投げかけたのです。

そのロールプレイでは、村人の中で村長、それから主婦グループの代表、それから若者グループの人たち、その人たちが学生に対してどうするかという計画を立てさせました。2時間ほどロールプレイの準備の時間を与えたのですが、2時間後に大変面白い結果が2つ出ました。まず、学生たちがロールプレイを通して理解したことは、自分たちはボランティアで村に入ると思っていたが、ボランティアは自分たち外国人学生を迎える村人の方なのだということでした。村人たちは学生たちを迎えるにあたって、寝るところや食べ物など学生が想像する以上にいろいろなことを考えて準備して学生を迎えているのです。

もうひとつはロールプレイによって、ほかの人に対する配慮が増したことです。ロールプレイをしなかったら、他者に対する思い、とてもセンシティブな部分ですが、そこに配慮がなかったかもしれない。例えば細かいことですが、最初の2週間という中で、学生が飲む水のペットボトルが15本空く。その空いたペットボトルをどのように処理をするのか。ごみとしてどこに捨てたらいいのか、それとも再利用をどうしたらいいのか、そういうことも考えなければいけません。

このペットボトルの例というのは、本当に小さなことかもしれませんが、しかし、学生が飲む飲み水1つに対しても、どのようにペットボトルを買うか。飲んだ後、そのペットボトルをどうするか。学生が1人入ることで、村人たちはいろいろなことを考えます。

● 「情報・知識の非対象性」、双方向の変化への期待、そして受け入れ側の安全管理

(スマリー) まず初めに感想を述べたいと思いますが、バングラデシュ、ドイツの方々の発表を聞いて、やはり学生たちは村に入っているいろいろなことを経験し、学んでいるということ、その思いを強くしました。

それと同時に、村人の方も学生に対して疑問や質問がわき上がってきています。先ほどの発表の中では、学生たちが来たらこのご飯食べられるかな、などの学生に対するいろいろな不安だったり、疑問が生じたことと申し上げ



ましたが、さらに、この学生たちの家族はどういう家族なのだろう、親の職業は何だろう、それから、日本の社会はどうなんだろうと、いろいろな疑問や質問がわいてきます。そして、村に来る学生たちはそうした村人たちの疑問や質問に答えるだけの知識をまだ持っていないということもしばしばあります。

村人が知りたいのに知りえないという理由は、1つは学生の方が知っているのにそれを話すことができないというコミュニケーションの問題、もう1つは日本人で日本の社会に住んでいるからといって、日本のことをよく知っているわけではないという現状、その2点です。

非対象性が語られていましたが、「情報や知識の非対象性」が体験学習に訪れる学生と村人の間にあります。先ほど述べたように、学生たちは村の生活やタイの生活からいろいろなことを学びます。しかし村人たちは日本の学生から学ぶことが大変少ないのです。この情報や知識の非対象性というギャップを何とか埋めていかなければいけないのではないかと思います。教育というのは一方的なものではなく双方向性のものであるので、やはり誰かが何かを学び、学んだ人からまた学ぶ、そういう双方向性が大事だと思います。

そのほか、今日は特にバングラデシュのバセッドさんのお話は身につまされるものがありました。毎年、恵泉だけではありませんが、日本の学生を受け入れてきましたが、村人が被災する危険性がその中に潜んでいることを知りました。危険を回避するためには、軽い気持ちで受け入れるのではなく、やはり受け入れる側にも自分たちの安全とか、それから衛生にもきちんと配慮しなければいけないという思いを強くしました。日本から帰ったらぜひ村人たちにバセッドさんの報告の経験をシェアしたいと思います。

● 置かれた状況の違いの認識、そして送り出し側相互の情報交換

(バセッド) 今日はたくさんの方の事例や、経験を聞かせていただき、とても私たちにも役に立つ内容が多く含まれていました。今日学んだことをまた生かしていきたいと思います。

それから、恵泉のFSプログラムを通して、受け入れ側自身が変わるべきなのかどうかという問いは、非常に難しい問題ではありますが、1つの例え話でお答えしたいです。

バングラデシュの海にイルカがいます。かわいいイルカです。それと鳥が友達になりました。鳥は空を飛んでいますので、どこかに行こうといったときにどンドン先に、先に飛んでいってしまうけれども、イルカは海の中を一生懸命泳ぎますので、とても鳥の速さにはついていけないわけです。そうした、お互いに関係はできたけれども、お互いの置かれている状況が違うということに即して考えてみる必要があるのではないかと思います。

また、フィールドスタディの送り出し側にもいろいろな多様性があります。恵泉女学園大学には恵泉独自のやり方やスタイルがあり、立教大学、関西大学、それぞれにはそれぞれのスタイルがあります。そうした送り出し側のスタイルについても、もっともっと相互に経験交流を深めてはいかげしょう。

それから、実際には受け入れる側には、来た方々を案内するスタッフがたくさんいるわ



けです。そうした一人一人のスタッフと参加者の側が、どうしてこのフィールドスタディに来たのかという目的をしっかりと共有しているということが大事だと思います。そうすることで、参加者の側が自分の目的を一生懸命追求するだけでなく、スタッフの側からも状況に応じた提案ができるのではないかなと思っています。

最後に、こういう機会をいただいたのであえて申し上げますと、これだけいろいろな面で発展した国である日本からわざわざフィールドスタディに来るわけですから、経済的にもまだまだ発展途上である我々の国に対して、フィールドスタディを通してもっともっと直接的な変化に対する影響をいただければいいなと思います。そういう意味でも、もっともっと来ていただきたい、交流を深めていきたいと思っています。

今日このシンポジウムに参加されている皆さんは、それぞれこのようなプログラムを担われている方も多いのではないかと思います。ですから、どういう人（学生）をプログラムの参加者として選び、どういう人（学生）を送ることでプログラムの目的が達成されるのかということを、それぞれの立場でもっと考えていただければと思っています。

● アジアとヨーロッパの FS プログラムの違い、そして FS 事前の意識化と FS 事後の意識化による変化

(白石) ドイツは、受け入れ側が変わろうとか変化しようとは全然期待していないと思います。開発途上国のアジア諸国で実施する FS プログラムと、ヨーロッパのような先進工業国と呼ばれる地域で実施する FS プログラムは違うと思います。問題そのものが違うといいたいでしょうか。



たとえば、バングラデシュに1週間行けば、学生たちはどこに問題があるのかということがわかると思います。ところがドイツの場合、特に日本と似通った歴史をたどってきて、今日日本で起こっている問題が10年前のドイツですでに起こっている状態です。つまり、すぐに目に見える問題を直視するか、すぐに目に見えないが隠れている問題を見つけるかの違いがあります。その点ではアジアとヨーロッパで実施する FS プログラムは違うと思います。

さきほどの発表では「学生たちはもっと大人になってから来てほしい」と申し上げました。つまり、大学側がどうこうと生活指導をしなければいけないのではなく、自己管理できる人がきてほしいということです。しかし、大橋先生のバングラデシュ FS のように、学生が事前学習によって、個人の課題や目的意識をもって FS プログラムの参加にやってくることは、担当の先生は大変かもしれませんが、いいことだと思います。そこまで事前学習を行わないと、ドイツの問題を学生は見ることができないでしょう。

恵泉のドイツ短期 FS は、LSI でこれまで8回実施しました。本日はドイツ FS に参加し、成長した学生たちがこの会場にも来ているので言いづらかったのですが、ドイツ FS が終了した後で、隠れた問題を日本に帰ってきてから発見していることがある。ドイツが先か、日本が先か。どちらが先の方がいいのかよくわかりませんが、事前に意識化することと事後に意識化することでは、現場のフィールドスタディはまったく違う FS になるということだけ、申し添えたいと思います。

(上村) ありがとうございました。それでは和栗さん、今の4人の方のコメントを聞かれて再コメントをお願いいたします。

● 受け入れ側に対する送り出し側としての大学の課題

(和栗) 「送り出し側として何をするのか」が問われているのではないかと今回それぞれのコメントを聞いていて思いました。

重要なメッセージをそれぞれ一言でまとめると、ドゥシット先生の「他者への思いを育てる」、次にスマリー先生の「情報や知識の非対象性の存在」と、「学生の事前の日本社会理解の必要性、そのうえで何かできるのではないか」とのメッセージがありました。それからバセッドさんの「送り出し側（大学）がどういう人（学生）を送るかを、送る側の大学同士で検討することも可能ではないか」との提案、そして最後の白石先生は「自分の目的意識を持ってから来るように」とのことでした。共通するのは、「送り出し側としての大学側に何ができるか」が問われているのだと思いました。

ただ、「送り出し側としての大学側」の姿勢を個々人の教授法とか、個々人の教え方のスタイル、教育者としての対応の話題まで突き詰めると、複雑な問題であるかもしれません。

今度は逆に、大学が制度として学生たちを海外プログラムに送り出す時、現場での負荷やネガティブなインパクトをどのように軽減して、かついいところはどう伸ばしていけるかという具体的な部分を今後はもう少し議論できるといいのかなと思います。



ドイツ・オランダ短期 FS：ライル兄弟オルガン製作所でパイプオルガン製作工程などを学んだ。ラクル兄弟製作のパイプ・オルガンは、恵泉のチャペルに設置されている。

シンポジウム参加者とシンポジストたちの 質疑応答

質問 1

体験先では学生にどのようなボランティアを行わせていますか？また、学生のボランティア活動を通して受入先は何を期待していますか？

チェンマイ大学のドゥシット先生と、PAPRI のバセッドさんにお話をお聞きしたいのですが、ボランティアワークとして学生に実際に具体的にどのような仕事や活動を提供されているのかというのがまず1点。それから、学生がボランティアをするということを通して現地側は何を期待されているのか、プラスマイナス含めたインパクトについてもお聞きしたいと思います。

というのは、やはり私が勤務する大学の学生は自分が何かしたいと思っていますが、しかし実際に数日間ボランティアを経験してみると、こんなことがしたかったのではないという学生ももちろんいますし、逆にそこで上から目線であったということに気づいていろいろ考える学生もいますが、そういうふう気づいてくれればいいなと思いつつも、やはりこんなことがしたいのではなかったという学生もいるのは事実です。

(ドゥシット) タイには NGO がたくさんあり、いろいろな部門、いろいろな対象で活動を行っています。例えばそれは開発だけではなくて、環境問題、健康問題、それから社会的弱者の問題、例えばストリートチルドレンであったり、前述したりハビリテーションセンターと言った元ハンセン病の患者や高齢者の施設であったり、いろいろところで NGO が活躍しております。

先ほどの質問に対して私は、学生はボランティアワークの中で何ができるか、また、それがどのような学びになっているかという2つのことをいつも考えています。何ができるかという点では、元ハンセン病の施設の中で、タイの人でもなかなかできないようなことを、自分がそこにかかわりたいという意欲を持っている学生がそのスタッフの指示の下で行うことをこなしていきながら考えます。また、ストリートチルドレンの支援施設、それから HIV エイズの患者の施設、NGO などでも、その NGO の指示に従って活動を行いながら考えます。

けれども、その中における学びの機会ということと考えますと、別にタイの NGO に行つて学びの機会を得なくても学びの機会というのはどこにでもあるというふうに信じております。

もう1つの質問の NGO はそうした学生たちにどのようなことを望んでいるかですが、最低限迷惑にならずに、何かしら役に立ってほしいということを現地の NGO は望んでいると思います。

(バセッド) 大変難しい質問です。正直、すべての人にボランティアワークとしての機会

を提供することはできないと思います。ただ、関係を構築できた人に対しては、真剣にもっと深くこの点を考えていく必要があると思っています。

特に今日、いろいろな話を聞かせていただいた上で感じたのはやはり学びという意味では、上からの学びの面が多いのかなということです。私たちは関係のできた人の一人一人のニーズをもっときちんととらえて、それに対して深く考えていきたいと思っています。実際に何が提供できるのかということを考えていきたい、そういった作業が必要ではないかと感じています。

(司会：上村) 和栗先生、NGO で何かやりたくて行ったのに、こんなことをするはずじゃなかった、したいじゃなかったという学生さんが出たらどうされますか。

(和栗) これはすでにプログラムをなさっている会場の皆さんもご経験があるかもしれませんが、「不幸探し」をする学生というのが最近私はすごく気になります。というのは、私の場合はスリランカが多かったのですが、学生がスリランカに行くと、「人々が貧乏じゃない」「太っている」「細くない」とか、「家もちゃんと建っている」と驚いている。何を想像していたのかとこちらが驚きます。もちろん事前学習を充分にしてから行くのですが、現場に行って探していた不幸というか、探していたショッキングなものが見つからない。なので紛争地帯に行きたいという学生がでてくることがあります。

このように不幸探しというものが起こってしまっていて、先ほど白石先生がおっしゃられた、1週間ですぐに目に見えるような問題というのを学生たち自身が期待しすぎている。提供する私自身や大学自身の問題もあると思いますが、そのずれは多いような気がします。

(司会：上村) 私は最近ではなくて昔からあると思いますが、やはり別の意味でどこか見下している部分があるのだと思います。非常に悲しいことを見つけると自分の達成感がない、という誤解をしている。普通に生きているということは何なのか、そこがわかっていない学生はたくさんいるような気がします。

質問 2

学生を受け入れることによって、受け入れ側はどのようなメリットを感じていますか？

私は約4年間カンボジアで国際協力にかかわり、最近では JICA のカンボジア事務所でスタディツアーの受け入れを行ってまいりました。最近まで受け入れ側として現場にいたものですから、今日お話を伺った4名の皆様のデメリットというか、現場へのインパクトといった声、金品の受け渡しについて、ホームステイや交流をすごく強いられるとか、無理なことを言って受け入れ側が迷惑をするとか、そういうことは私自身も感じておりましたので、共感することが多かったです。

その上で今、学生を受け入れる側から送り出す側に立って、大学としてはどういう教育プログラムを提供していけばいいのかと考えています。報告の中でもすでにあつたと思いますが、あらためて1点お伺いしたいことは、実際に受け入れることで何がメリットなのか、受け入れ側にとってインパクトは何なのかということを確認する上で、一言ずつでもお伺いできればと思います。

(ドウシット) チェンマイ大学の一教員として、なぜこうした交流プログラムを受け入れているのか、そのメリットは何かと一言で聞かれたら、一言で答えるのはプログラムの受け入れがタイの学生にとってもメリットがあるからと答えます。それは、チェンマイ大学がタイの学生にこうした機会を与えるということが大変少ないからです。

先ほど先生のお話にも出たように、少なくとも1年に3人の恵泉のフィールドスタディと関係のあるタイ人のNGOや学生や村の人たちが、タイの外に出ているいろいろな研修の機会、たとえばバングラデシュのFSと一緒にいくとか、そういう研修の機会を得ています。これは3人とはいえ、とても大きなことです。

それから、チェンマイ大学には日本語学科があるのですが、あえてプログラムには入れていませんが、日本語学科の学生が日本人の学生と触れて日本語学習の機会をををもっと高めるといことはあります。チェンマイ大学のキャンパスの中に外国人がいる、また異文化を持った人たちがいるということ自体が、自分たちと異なる文化の存在を確認し、理解する、異文化と交流するという機会を促進していると信じております。

(スマリー) 受け入れてよかったことは、もうすでに申し上げていますので省きますが、それに付け加えるとしますと、お互いに交流することによって期待が深まるということです。初めは「何、この人たち」と思っていたのが、だんだん知るにつれて「次はこれを聞いてみよう」、「次はどうか」、と継続していることがやはりまた学生を受け入れようかなという気持ちにつながります。

ですから当初の目的、恵泉が長期FSで村人の生活からいろいろ学ぶという第一段階は過ぎて、今は次の段階に進んでいるのだと思います。学生が学ぶ、村人たちも学ぶ、その相互の学びの機会の場の提供ということがこれからの課題になってくるかと思えます。

先ほどから海外へ出かける前の事前準備が話題になっていますが、大学での準備授業の中で学生にどういう問題意識を持たせるか、また日本や自分が住んでいる社会のことをもっと知るといことを要求したいのですが、それには大学や教員だけの努力ではだめではないかと最近はおもっています。どの協力が大事かといいますが、学生の親の協力です。学生の親御さんにぜひこのプログラムにかかわっていただきたい。もっと積極的にかかわっていただいて、親御さんたちもこのプログラムの中で学ぶという機会があってもいいのではないかと思います。

(バセッド) メリットといっても非常にたくさんあって、すでに言ったこともあります。また例え話で恐縮ですが、ゾウには2種類あると思います。ゾウは餌をたくさん食べます。それは自分の体を大きくするためというゾウが1種類。もう1種類は、敵を攻撃するために餌をたくさん食べる。こういう2種類のゾウがいるとして、我々は攻撃するゾウの牙に当たるのではないかと考えています。

私たちはフィールドスタディを送る側の目的に合わせている部分もあります。ただもう1つ言えるのは、国全体の発展、例えば国際的な話など、大きな話はよくされますが、もっとローカルな、本当に1つの小さなコミュニティについては、なかなかフォーカスされない傾向にあります。こういうFSプログラムを通して、ある1つのコミュニティの開発に対してもっとマイクロにかかわってもらえるという利点もあると思います。

実際に現場を訪ねることで私ども現場の問題を考えてもらうこともできるし、先ほど申

し上げたようにいろいろな事件が起きたときにそういうマイクロなつながりを通して、支援を受けることもあるわけです。以上の点をメリットとして挙げられるかと思えます。

(白石) 先ほども申し上げましたように、私どもは語学学校です。ですから、日本語を学びに来ている学生に恵泉の学生さんと接触してもらいます。まずそのコーディネーターが大変ですが、先ほど川戸先生がおっしゃったように生の日本人が来てくれるのが一番のメリットです。

できるだけ恵泉のフィールドスタディの持っている問題意識、外国人問題とか社会問題のようなことを、こちらの上級コースや中級コースなどでプロジェクトワークとしてぶつけてみる。そして話し合ってもらおう。それは両方にとっていいことではないかというのが、まず一番のメリットです。それがなければおそらく受け入れを承諾しないと思います。

次に経済的なこととして、私たちのところも客室が空いていればそれだけ収入になりますので、寮を活用していただくのもメリットです。でも一番のメリットは、生の日本人が来てくれるということです。その後、ドイツ人と交流を持って今でも交流しているこちらの学生さんもいらっしゃるようですし、そういう意味でも交流の機会になると思います。

それから、小学校とか総合学校（高校に当たるようなところですが）などを訪問されると、日本人が来てくれたことで学校の授業の中で日本について調べてこいというような課題なども生徒に与えているようです。ドイツの子供たちに日本に対する目が開けていることは連れていった先方の学校でのメリットだと思います。

それから国際平和村では、恵泉からの訪問者の寄付は、国際平和村のメリットになります。



ドイツ短期FS：小学校を訪問した。

まとめ

(和栗) 最後に3点、今日お話を伺いながら私自身が強く認識したことについてお話をし、まとめとさせていただきます。

1つは、先ほどバセッドさんが例えて話された鳥とイルカの例のことです。それは共有することを表していると思います。共有があまりにも少ないと、いい部分も悪い部分も現場にどんなインパクトが生じているのかわかりません。それから、どんなふうにしてほしいのかということも、共有されないまま進むとそれこそ暴力的なものになってしまうのではないのでしょうか。よりお金のある国が、もしくは力の強い人が勝手にお願いをしていることになるのではないかと思います。

2点目に、今日のような会合は非常に意義があると思います。多くの大学がこういった体験的な学習を取り入れていく中で、より優れた実践のためにいいものも悪いものも含めてインパクトということを意識化して、かつそれを言語化、ドキュメンテーションしていくことが今後必要になってくるだろうと思います。

最後に、2点目とも重なるのですが、今、大学教育改革という中で、FD、SDが話題になっています。体験的な学習の手法というのは、FD (Faculty Development)、SD (Staff Development) のきっかけともなると思います。先ほどからのコメントというのは、やはり教育手法の部分や、大学の体制の話をお話しなさっている。職員のかかわり方というものも出てくると思うので、そういった意味でも、今後議論を詰めていって何かしら形として残していくといいのではないかと感じました。

国際シンポジウム 「海外体験学習における受入側のインパクト」のまとめ

恵泉女学園大学 体験学習 CSL・FS 委員会委員長 上村 英明

これまでの議論を踏まえて、本日のシンポジウムをまとめます。

今回の国際シンポジウム「海外体験学習における受入側のインパクト」は、以下5点にまとめられると思いますが、その前にあらためて本企画「海外体験学習における受入側のインパクト」を実施してよかったと思いました。先ほどドゥシット先生が、違いを理解しながら、同じ人間であるということを理解していくことが大事であるし、それが当たり前じゃないとおっしゃいました。21世紀は、国を越えて、我々の違いを踏まえて、でも同じ人間なんだということを理解するということをさらに前に進めなければいけない時代です。その意味で、こうした海外体験学習という分野は、これからもっともっと広がる部分(可能性)を秘めているのだということあらためて思いました。

1. 英語以外の言語による国際会議開催の意義

さて第1点目の評価ですが、今回、日本語とタイ語とベンガル語で国際会議を実施したということが印象深いことでした。国際会議を開催すると、やはり使いやすい言語、例えば英語で会議をしがちです。実はドゥシット先生は英語が得意なのですが、英語の得意な方だけを集めると、本当に地域や現場のニーズが分かるのかが疑問です。

そうしたものにチャレンジするときに、やはり通訳者が必要です。ウィスパリングなどで参加者の方には大変なところもあったかと思いますが、通訳者のご協力をいただいて、現場できちんと実践していらっしゃる方たちから意見を聞く機会をつくったことは、企画側としては大変よかったと改めて思います。

2. 海外体験学習の企画側(大学)の「クオリティー(質)」の確保

第2点目は、先ほどから皆さんにいろいろなお意見を伺った中で、この海外体験学習は企画する側のクオリティー(質)をきちんと確保しなければいけないという意味で、こんなに難しいプログラムはないだろうとあらためて感じました。このクオリティの問題は大学の体制全般に言えるでしょう。奇特な先生がいらっしゃるからプログラムが実現可能であるという次元ではなく、体験学習プログラムを大学の中できちんと位置づけることが大事です。事業を実施するために、どのような素養をもった教員が必要で、どんな支援体制を大学は組めるのか。そのためどの程度の予算をどう使っていくことが必要なのかということもきちんと詰めて考えていかなければいけません。逆にいえば、中途半端な形だけのプログラムはいくらでも作れるということです。

もちろん恵泉のプログラムがベストであるとは申し上げません。本学もまだまだたくさ

んの課題を背負っています。しかし今日あらためていろいろな方のご意見を伺うと、大学の体制がしっかりしないといろいろな方に迷惑も掛けてしまいますし、誤解の原因にもなってしまいます。それは本来の体験学習をポジティブに進めていくこととは逆の効果を招きかねません。その意味で、海外体験学習の企画側のクオリティーの確保というのがとても大事だと思いました。



インドネシア短期FS：伝統のサダン織りを学ぶ（サダン村）。

3. 最低限の「礼儀」など事前準備の重要性

3点目は、事前準備（事前学習）の重要性です。これは皆さんがおっしゃっていましたが、とても大事だと思います。バセッドさんのバングラデシュでのスタディツアー実施中の事故とその後の焼死事例などを伺い、本当は学生だけではなく、こうした分野の研究者も一緒に学んでほしいと思いました。

くり返しますが、事前学習を怠らないことが本当に大事だと思います。特に先ほど学部長が例にあげた、最低限の「礼儀」について事前に学ぶことが必要です。知識を深めることももちろん大事です。しかし、例えば村に入れば、先ほどドゥシット先生が指摘されたように、村人の方がボランティアであって、ある意味では学生たちの方が自分たちの社会を背負ったメッセンジャーになるわけです。そのときに、難しいことは分からなくても最低自分がどんな役割と責任を果たさなければいけないのか、そういう意味での「礼儀」という言葉にまとめますが、そうしたものを事前にきちんと教えるということがあらためて準備の中でクローズアップされるのではないかと思います。

4. コミュニケーションの重要性

第4点目は、体験学習を実施するときのコミュニケーションの大事さです。いわゆるワンサイドではない、あるいは一方通行ではないコミュニケーションを、いろいろところで工夫しながら図っていかねばいけません。例えばバセッドさんが指摘されたような参加者とスタッフの間のコミュニケーション、そしてドゥシット先生とスマリー先生が指摘された大学（実施機関）と学生と村人の間の相互のコミュニケーションを図る。それから、学生の親に参加してもらおうという新たな形態のコミュニケーションも提案されました。さまざまなコミュニケーションをさらに豊かにしていかなければいけません。

恵泉の場合は、長期フィールドスタディプログラム運営にあたってチェンマイ大学との間にNGO基金を設立し、互いにこうした努力はやってきたのですが、この基金の運用を内容そして量ともに拡充させて、いろいろな企画を発展させたいとあらためて思いました。

学部長とも話をしましたが、例えば今回のシンポジウムのような評価会のようなものをチェンマイで村人たちにたくさん来ていただいて実施するという企画なども、まだ絵に描いた餅ですができたらいいと強く思いました。



バングラデシュ短期FS：ビハール難民キャンプにて。

5. 海外体験学習と国内体験学習、双方向性の学び

第5点目は、あらためて日本の中で何が起きているのか、日本ってどんな社会なのか、ということを考えて海外へ行く。あるいは、海外に行って考えてきたことをもう1回自分の足元で確認することの重要性です。

私は体験学習の委員会でFS（フィールドスタディ）と、もう1つのCSL（コミュニティー・サービス・ラーニング）の両方を担当しています。CSLはちょうど2年ほど前から恵泉で展開してきました。これからの体験学習の課題として、FSとCSLを双方向に関連させて大きくしていきたいと考えております。今日の議論を聞いて、あらためてこうした国内と海外での体験学習の双方向での取り組みが重要だと感じました。



ニュージーランド短期FS：マオリ語で「森の神」と呼ばれるカウリの森で。現存している最大の木は樹齢2000年だという。

Conclusion (Summary)

Keisen University UEMURA Hideaki

The significance of the Symposium “Impact of Study through Overseas Experience from the Hosts’ Perspective” can be summarized by the following five points.

In the 21st century, the idea of multiculturalism, meaning going beyond the international borders while respecting differences of identity, and understanding that we are all members of the same human race, should be put forward further. In that sense, Study Through Experience has the potential to expand further.

1. A gain by holding an international conference in a language other than English

First, we consider it to be epoch-making that we held an international conference in Japanese, Thai, and Bengali. International conferences tend to be carried out in English, which so many accept uncritically as the “international language,” but it can hamper exchanges in the realm of daily life. In particular, for a project that involves the evaluation of the Study Through Experience program, with the aim to encourage exchanges in the actual scene of daily life, it is important to exchange views concerning practices in the field with interpreters as we did during this symposium, and it has the potential to become a model for the future.

2. The need to secure quality on the part of the planning side (universities) of Study Through Experience

We realized anew that we need to secure the quality of the planning side (universities) in the Study Through Experience program. Concretely speaking, there are issues involving the quality of the teachers implementing the program and involving understanding on the part of the secretariat supporting the program. It is important for the educational institutions called universities to positively value Study Through Experience programs, including today's theme. Simply having a program where teachers with overseas experience take students overseas is not sufficient for judging the educational effects and response to the problem.

3. Importance of pre-trip preparations from the viewpoint of “manners”

The importance of pre-trip preparations (pre-trip study) cannot be overemphasized. While it is of course important for students to gain a deeper understanding of the society

they will visit, we felt anew that they also need to learn a minimum amount of “manners” prior to the trip. For example, when they enter a village, students become messengers from the society they are from. Even if they do not understand complex things, they should at least be able to judge what kind of role they have to play. This is not a matter of knowledge but of human character. Education on these points can be summarized under the term “manners.”

4. Importance of the daily communication of actors participating in the program

In the implementation of the Study Through Experience program, the communication -mutual understanding that is not a so-called one way communication- among various actors involved in it is important. There are various forms of communication: communication between participating students and the staff of the host organization and mutual communication between the university (implementing organization), students, and villagers. As was pointed out today, the parents of students should be added to this. Concerning the communication with the host side, I also felt that the daily relationship beyond that of the program is quite important. I gained the understanding that we should have richer communication in various scenes.

In operating the long-term field study program, Keisen University has established a NGO fund with Chiangmai University. I would like to expand the operation of this fund in terms of both content and quantity and develop various projects.

5. The promotion of two-directional and interdependent learning between the study through overseas experience(FS) and study through domestic experience(CSL)

Finally, I keenly felt the importance of knowing what is happening in Japan or one's own society, what kind of society Japan is, before going overseas and then confirming what one has thought about during the overseas experience back in one's own society. Keisen University's Study Through Experience program has, in addition to FS (field study), a CSL (community service learning) program. I would like further develop these two programs as they are mutually related.

シンポジウム参加者の感想

(一部抜粋)

■外国に対していかに学ぶか、どう感じるか。何に対して疑問を持つか。自分（日本）とどう違うか、自分（日本）と同じと考えられる部分は何か。それらをどう表現するか。(中略)民族学においては村の人達は毎日の生活の中のことで、今、調査しなければすたれてしまうことを気がつかない(民族衣装等)ことなどは、外からの方がわかるので、積極的にやってほしい。そうして日本と比較してほしい。

■体験学習後、受け入れ側と送り手、学生を交えた意見交換会(何を求めるのかetc)があれば良かったと思う。(→次の学生や、本人が次年度学ぶ為にも良いかと思う)

■このシンポジウムに参加させていただいたことを感謝します。白石先生のおっしゃった「大人になってからドイツに来て欲しい」のコメントには、まさに、今の日本の教育の現状が集約されていると思います。相手の価値観をその価値観のまま受け入れるには、自尊心が育っていないと難しいと思います。残念なことに、今の日本では、親や社会の過干渉・過保護・あるいは無関心から、人間として成長する・成熟する機会をほとんど奪われて、知識だけを詰め込み、プロイラーのように画一的に教育されます。相手の人生と自分の人生を愛しく思う気持ちの上に相互理解があると思います。人種・国籍・文化・宗教の違いをお互いに内包しながら、同じ目線で認め合う、このことが世界の平和を築く為の最初の一点になるのだと思います。それぞれのワークが短かろうが長かろうが、有償・無償の非対称性、機会の非対称性があるが、全てを抱き合わせて、続けていくことが大切なのだと思いました。知識というのは power です。その power をどう使うかを、どこを見ながら使うかを考える機会を小さいうちから繰り返し与えることが必要なのだと思いました。このシンポジウムは視点がとても面白いと思いましたが、改めて、「全てのことはつながっている」ということを強く強く感じました。「相手とコミュニケーションをとれない日本の学生」というお話が出ましたが、行動を制限する(行動出来ないこと)一番の原因は恐怖・不安だと思います。「自分で自分の存在を認められないこと」、「考える習慣がないこと」これは、他者との関係を作る上で本当に大きな障害となるのですね。もう少しかみくだいた内容にして、中高生に伝えたいと考えています。

■(略)卒業生です。学生時は、ただ参加しただけでしたが、今回このシンポジウムに参加して、受け入れ側のメリット、デメリットを知ることができました。社会人となり、海外へ何度も行きましたが、FSのような濃い体験はできません。学生時にFSに参加できて本当によかったと思います。

■「受入側のインパクト」の観点は、大変大切なことなのに、多くの場合、忘れられがち、あるいは抜けていることを気づかされた。(略)

■一言で表現できない程の大きな責任を感じています。

■大学の者として、事前、訪問中、事後のフィードバックをどのようにするかをよく考えてみる必要があると思いました。

■バングラデシュに2度行きましたが、やはり、訪問するに当たってはしっかりと準備、心づもりが必要なだと改めて感じました。他者のことを考える、自分たちが相手に与えるもの、をしっかりと考えていかなければいけないのだ、受け入れる側がボランティアをしている、というのはまさにそのとおりでと思いました。学校が全面バックアップしていることがうらやましいと思いました。

■学生の意識のたりのなさを感じた。

■各事例のご紹介、大変勉強になりました。ただ、FSも長期・短期・実施地域も多様で、非対称性の意味も相当バリエーションがありえるのではないかと思います。今日お話をきいて、あらためて「現場」「体験」「学習」のそれぞれの意味を問い直す必要を感じました。(略)

■バセッドさんの話に代表されるように、受け入れ側は「どういう環境を提供すればいいのか、頭を悩ませている」という点に感銘を受けました。白石さんの「成長してから来てほしい」という点も重要で、送り出す大学側の課題であると痛切に感じました。受け入れ側が、どういう点に心を砕いておられるかということ、日本からの出張者による報告ではなく、現地の当事者が来日してお話いただいたことが、たいへんインパクトと説得力があり、非常に有意義であったと思います。たいへんありがとうございました。大学の取り組み姿勢（特に、体制の問題）をえぐり出したところが、もっとも印象的であったと思います。



当日は約90名の参加者があった

国際シンポジウム

「海外体験学習における受入側のインパクト」の録画DVD鑑賞会^(注1)の感想

2005年度長期FS参加 寺岡 久美子

先日はDVDをありがとうございました。2年前のことを思い出しながら観ていました。タイで最後に行われた、あのFS評価会でスマリー先生のご意見を聴くまでは、私は村の人たちが私たちから学びたいと思っていてくれることに気がつきませんでした。ですから、シンポジウムの「村自体が勉強の場になる」といった言葉は耳に残っています。

FS参加中の学生宅、パンラオ村、パヨーイ村でのホームステイに限って言うと、当時まだタイ語にも慣れず、日本のことを話したり、村の感想を伝える会話力は持っていなかったことは大きな壁でした(言い訳ではありますが…)。日本の生活や、学校の話をしたり、日本の着物の話しをすると、タイ人の文化として「着物はいくらするの?日本の大学の学費はいくら?飛行機代はいくら?」と質問されることが多く、正直に話すと「うわあ高いね。日本人はお金いっぱい持ってるね」「日本に働きに行きたいんだけど、仕事紹介してくれる?」と、言われることもあったので、どんな日本の話をしたらいいのか迷ってしまった経験は正直何度もありました…。私の至らなさでもありますが。

FS前にあまり派手な格好をしたり、ちゃらちゃらした持ち物を見せつけてしまうことは、若者のアイデンティティを崩すこともあると注意されていましたし、物価の違いや日本の問題を話すほどの会話力がない段階で、お金の話になるのはいやだな…という気持ちが常に私の中にあったことも事実です。それによって日本の何を話せばいいのかとまどいがありました。これは参加学生の間でもたびたび話題になり、皆の共通の課題でもありました。

でも、スマリー先生のお話を聴いて、日本のことももちろんですが、村での学びや感想を伝えられていなかったことが大きな反省点だと感じました。例えば、FS報告書にも載せてある学生の村の感想は、全員でA4一枚くらいにまとめたものなので、皆で協力してタイ語に訳し、人数分コピーしてホームステイ先に感謝状・写真と一緒に送れば私たちの学びや感じたことを知ってもらえたはずですが、一人で感想文をタイ語にするのは難しいですが皆でやる分には楽しくできた気がしますし、村の皆さんにも少しは知ってもらえたと思うので…。

それから、ドゥシット先生のお話で、私の活動を紹介して下さったのは素直に嬉しかったです。

「受け入れ側も学生から学ぶ」との言葉がありました。私は体験学習中、自分がタイの人にとってどう思われているのか、ここにきて本当に良かったのか…と迷っていた時期があったので、タイの方々が、私の関心や行動から、少しでも何かを学んだと思って下さったなら、こんなに嬉しいことはありません。

そういった意味でも、私たちが学ぶだけでなく、学びを共有できる場として、FSがずっと続いていくことを願って止みません。

長くなりましたが、こんなことを考えながら観ていました。このDVD、FS参加前の学生さんにぜひ観て欲しいですね。

注1 2007年12月4日に、国際シンポジウムに諸事情で参加できなかった学生、とくに長期FSに参加した学生を対象にDVD鑑賞会を学内で行った。

編集後記

「海外体験学習における受入側のインパクト」という国際シンポジウムは、当日の議論だけにとどまらず、その後いくつか発展した展開を見せている。

とくに長期 FS プログラムを現地タイで受け入れてくださるドゥシット先生とスマリーさんには、シンポジウム後3日ほど日本に滞在していただき、本学の教育方針や体験学習に対する理解をより深くしていただいた。この3日間、本学の体験学習委員会の委員で、かつ本学の園芸プログラムに関する特色 GP (2007年度採択) の取組担当者でもある澤登早苗先生の案内で、山梨県の有機農業、農の暮らしや教育、地場産業などに関し関連施設を訪問したほか、スマリーさんは体験学習でかつて彼女の村に受け入れたことのある恵泉卒業生の自宅に1泊2日のホームステイをして、交流を深めた。さらにドゥシット先生には、本学の農場が所在する町田市にある社会福祉法人・共働学舎にも学生と一緒に訪問していただいた。共働学舎施設長の田中公明氏は、本学の客員教授として体験学習のもうひとつの分野であるコミュニティサービスラーニング (CSL) プログラムで大学教育と地域を結びつける重要な働きを担っていただいている。田中氏とドゥシット先生の障がい観や社会運動、そして現場と教育との関わりについての白熱した深い議論は、短い時間ではあったが、同行した学生たちにも大きな刺激を与えた。

また今回の国際シンポジウムは、プログラムの新たなステップのきっかけになろうとしている。たとえば、スマリーさんは、学生受け入れの際に痛ましい事故に遭遇したバングラデシュのバセッドさんの報告に触発され、チェンライの村にバセッドさんを招いて受け入れ側の資質向上と教育への関与について村レベルで議論する集まりをもちたい、と提案された。さらにシンポジウムでの議論に興味深く聞いておられた共働学舎の田中氏は、さらなる体験学習という教育プログラムの質向上のために、タイの村人の招聘と日本の NGO・NPO への訪問などコミュニティサービスラーニングとフィールドスタディの接近と融合を示唆するプログラムを提案されている。本学では教育の質向上に直結するスマリーさんや田中氏からのこれらの提案を真摯に受け止めており、具体的な実現可能性を議論している。

では、こうした大学側の思いを当の学生たちはどのように受け止めているのか。この国際シンポジウムの後、当日は学園祭だったために他の展示などでシンポジウムに参加できなかった長期 FS 修了生が中心となり、シンポジウム開催3週間後に、当日のシンポジウム録画 DVD 鑑賞会を自主開催した。その時の学生の感想は本報告書75ページに掲載している。「今後 FS 参加学生必見」と学生の感想にもあるように、受け入れ側のインパクトについての議論は継続して次世代に伝えることが必要であろう。

フィールドスタディやコミュニティサービスラーニングという体験学習は、それぞれの現場で活動し、学生を受け入れてくださる人々に触発され、支えられ、そして育てられている。受け入れ側の人々の負担に配慮しながら、互いに学びあい、そして発展して継続できる体験学習をこれからもめざしたい。

体験学習 CSL・FS 主任 斉藤百合子

2006年度文部科学省「特色ある大学教育支援プログラム (特色 GP)」
「専門性をもった教養教育としての体験学習」

国際シンポジウム
「海外体験学習における受入側のインパクト」 報告書

2008年 2月29日 発行

編集・発行 恵泉女学園大学 人間社会学部 体験学習 GP タスクフォース

恵泉女学園大学 人間社会学部
〒206-8586 東京都多摩市南野2-10-1
TEL 042-376-8211 (大代表)
FAX 042-376-8218
URL (大学) <http://www.keisen.jp/>
URL (体験学習 GP) <http://www.keisen.ac.jp/univ/gp/index.htm>
E-Mail fs@keisen.ac.jp shien@keisen.ac.jp

印刷所 株式会社 プリント永山
〒206-0033 東京都多摩市落合2-6-1
電話 042-311-3355 FAX 042-311-3356

お問い合わせなどは恵泉女学園大学までお願いいたします。
写真には肖像権がありますので、写真部分を複製、転載される際にはご一報ください。



学校教育OK www.bunka.go.jp/jiyuriyo

